

第1回文芸思潮新人賞発表

文芸思潮新人賞

第一回目の文芸思潮新人賞に、鋭意御応募くださいまして、まことにありがとうございます。二九篇の応募数でしたが、その内容は素晴らしく、優れた気鋭の作品が多数寄せられました。これまでにない新鮮な文学世界が開かれ、まさに新進気鋭の鮮やかな言語世界が切り開かれました。心から御礼申し上げます。

予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

誌面の都合により、奨励賞などの作品は次号以降に順次掲載させていただきます。

第一回文芸思潮新人賞授賞式・祝賀会は、申し訳ございませんが、コロナウィルスの関係から見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、よろしく御了承ください。

なお文芸思潮新人賞は明年も枚数、縮切、審査料などすべて同じ要領にて募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちしております。

優秀賞

なし

奨励賞

「転生」

中山喬章 (京都府京都市)

「その重さの金と同価値な」

芦田孝祐 (福島県大沼郡)

「シエアメイト」

河村直希 (埼玉県大里郡)

最優秀賞

「光源」

北谷ゆり (福岡県豊前市)

「赤白休暇」

石田夏穂 (東京都豊島区)

「桃と煙草」

深澤眞歩 (東京都品川区)

佳作

「大根運び」

絃世新土

「神無月のウソ」

うみのまぐろ

「白痴夢」

檀もも

「アンダーグラウンド・マザー」

紅露 冴

「河童の一人酒」

アイリス・ニック・クロウ

「案山子」

齋藤圭介

入選

「シマウマの国」

千久光太郎

「少年と巨人」

櫻井 瞳

選評

極めて優れた言語感覚

五十嵐 勉



第一回の「文芸思潮」新人賞は、応募作品はわずか二九篇だった。新人賞でこれほど少ない応募数も稀だろう。しかし中身は素晴らしかった。賞の特異な点は、たとえ一篇しか来なくとも、それが素晴らしい作品であれば満悦至極万歳であり、一〇〇〇篇集まっても駄作ばかりで称揚すべき作品がなければ、大失望落胆虚無奈落である。その意味からは、第一回新人賞は審査員一同狂喜に近い満足度で、御機嫌で酒宴に及んだのが事実である。

特に優れた作品が三篇あり、どれも高い言語感性を備えていて、完成度は言うに及ばず、現代を捉える新鮮さに溢れ、新しい世界を提示する、正に新人賞にふさわしいものだった。

およそ新人というものは、それまでの既製の作品には見えて、大いに安心した。未来は広がっており、託すに値する力を得た。

しかも今回は一人だけでなく、三人だったことも豊漁感に包まれた。二九人中三人が当選に値するということは、確率からすれば快挙であり、奇跡に近い。またそれに準ずる作品もレベルが高かったことを考えると、この世代への期待感はずばりである。

三人に共通するのは、卓越した言語感覚で、言葉を駆使する自在な飛躍力に加えて、現代の若い世代でなければできない闊達な躍動がある点である。

まず最優秀賞当選の北谷ゆり氏の「光源」から見よう。「彼、青っぽい雰囲気纏っている。然有らぬ趣で、ほやほやとうすら青い明るみ醸成するかと思えば、鮮烈でカブトガニの血痕のように、たらたらと流れて消えぬ血痕を足取りに残して、肌に触れるものすべてを染めつくしてしまふ。その血腥さはとくに、雄雄しいんだか、女らしいんだか執着した性欲に掻き立てられている最中は濃厚だ。」

肌を接する交わりを通して描写される一人の男性への輪郭は、触感とイメージのうちに青さと血の濃厚さを溶かして、肉感としての彼を浮かび上がらせる。異性は小説の中で肉体の対象としてあるだけだが、そこに紡がれる言葉の重奏の豊かな逆りは新鮮な弾力で生きた言語空間を繋ぎ

られなかった何かを備え、新時代のある部分を引き受けて、それを自在に駆使展開し、新感覚の言語造形をなすものだろうが、これらの著者三人は、ものの見事にそれを体現している。

賞をスタートさせるとき、半分は不安があった。

一〇〇〇篇を超える応募者数のある大手の文芸誌の新人賞作品には、このところそれほどいいものがなく、レベルもトーンも下がっている現実があり、大学で文芸関係の講師をしている知人からも、学生たちが志賀直哉や川端康成や三島由紀夫や大江健三郎など過去の作家作品を読んでいなければかりかその名前さえ知らない事実を知らされたり、スマートフォンによる安直な文章に興じ、画像や音楽をもっぱら優先させていたりする光景を目の前にするとき、若い世代が総体的に濃密な文章や文学から離れ、結果的に文芸創作の能力そのものが落ちていっているのではないかと危惧したからである。二九人という応募者数を突き付けられたとき、その不安は最大になったが、三篇その他に触れてそれは霧消した。

それどころか、この三人には、我々の世代以上に、またこれまでの作家以上に、極めて優れた言語感覚があることを認め、その能力の高さに敬服した。世代による言語感覚の後退など杞憂に過ぎず、むしろ進化していることを確認

していく。現実との接点を残しつつ、言葉は舞い、ストーリーをぼんやりと描きながら、次の言葉の蜜を求めて、世界と交わっていく。

ここに見られる言葉の躍動性と転力は、詩的でありながら、また詩とは異なった言葉の造形力を示して、世界を蚕食していく。それらの言葉の駆使は、生半可な鍛錬では得られない、不測の蓄積と挑戦意欲を蔵している。その言語構築はすでに深い領域に達している。これまでの散文の限界を突き破って、新しい領域を開拓している。

無論読者は、言葉の舞踏に魅せられながら、どこへ連れていかれるのか、朦朧とした不安に包まれる。ストーリーは、触感と表裏の舞踏の影に隠れて、はつきり見えないからである。ここでは、恋人に普段のセックスとの違和感を覚えられて、追及され、強姦されたことを告白し、怒った恋人が警察に連れていって、取り調べを受けさせるといふのが現実の流れなのだが、犯されるシーンに性の根源的な衝動としての光源を見る深い遡及がテーマになっている。

この流れの果てには、現在の恋人とも別れることになる結末への暗示は、奥行の深い造形をなして、筆者の小説構築への並々な傾斜を示している。

おそらく読者は、もつとストーリーをわかりやすくしてくれ、背後に沈めずに、はつきり表に打ち出してくれ、と

主張するだろう。しかしこの筆者にとつては、そういう現実そのものが二次的なものであり、求めている世界に附着してくる夾雑物にすぎない。だから曖昧なまま、流されるままのものでいい。警察さえ現実の模様の一部分にすぎない。

こういう世界を書き続ける作家は、これからのような展開を見せるのか、興味深くもある。光源を求めて舞い続ける蛾のように、吸い込まれることを究極とするのか、それとも舞そのものを独立させていくのか、肉体が伴うだけに、様々な想像を掻き立てる。しかし現代という局面において言えるのは、バーチャル空間の広がりの中で、生身の実感に根ざしている強みがあることである。仮想の迷妄の氾濫の中で、こうした実感こそが屹立し得るのかもしれない。減びを見つつ生物の本源に迫る切り結びの覚悟が、未踏の領域を開くだろう。

石田夏穂氏の「赤白休暇」は、鋭い言語感覚のうちに現代の空間性を取り入れて、一万キロ以上隔たったインドネシアの地と空港やロシアやトルコからメールで発信して繋がりを描くところに、現代でなければ構築し得ない恋愛の傷みを浮かび上がらせている。メールを通して確認されるインドネシア青年の環境と立場の違いが、地球規模の空を駆け巡る広がりの中に明らかにになり、結ばれず断ち切る

葉の奥行によって響き合う深まりではなく、紡ぎと紡ぎの間にある飛躍性のおもしろさだろう。次から次へと繋がって同時に裏切っていく言葉の新鮮な意外性は、現代の淡い色彩とリズム感を伴って、快適に流れていく。その弾力はダンスのような軽快感がある。書き出しからすでにそれに魅了される。

「桃味と煙草は口の中に貼り付く。／だから嫌いだ。／パニラの味だとか言われてもらったタバコを灰皿にぎゅー、と擦り付ける。アコーディオンのように縮んでいく。どう見たって汚い灰が赤い光をまだ内側に宿したまま、ぼろ、と私のかける圧力から逃れてこぼれる。」

ストーリーも意外性を孕んでおもしろく進んでいく。独特の文章ダンスに乗せられていくようだ。出会い系メールで顔を合わせた相手が予想に反して男ではなく、女で、その名前が「モモ」だったり、それに合わせて自分を「タバコ」「バタコ」と繕ったり、グングン引き込まれていく。「『あなたの名前は』／モモが悪そうな笑顔で聞いてくる。どういう意味の笑顔なんだ、それ。私は本名を名乗りたくはなかった。そういえば桃って、私の嫌いな味じゃん。」ここにある人間の付き合ひ方は、根や属性を消して、親しみや温もりという直接的な感覚で繋がりが、交わっていく。連絡を取り合ったメールを消してしまえば、それきり相手は現実

しかない傷として、痛みと疼きを発しつつ、尾を曳いていく。それぞれの言葉の感覚の膨らみは少ない分ストーリーはわかりやすく、菌切れよく、シーンは進んでいく。その移動に現代の通信による地球規模の意思伝達を現在進行形として乗せていく。ここにあるのは、一つの恋愛や一つの傷みの世界化であり、体験の絶対性が地球を包んでしまふ恐るべき広がりだ。地球の裏側にまで離れている距離を断ち切ることなく、どこまでも繋がっていく、情緒の屹立性が露わになる。一人の人間の中に燃え燃える情緒が、地球に孤独に浮遊する感覚を取り出して見せたところに、この小説の新鮮さがある。ここを抛り所にして、宇宙に浮遊する情緒の絶対性さえ主張できる可能性も秘めている。前半の孤独な旅の感覚に比べて、後半の家族との旅行シーンは、その繊細な鋭さがファミリーの温もりによって減じてしまっているのがやや惜しまれるが、この空間性の基軸に目を向けた新しい文章構築は、現代文学に斬新な領域を広げていきそうな気配がある。国際結婚や海外留学や海外事業が増え、土地や歴史から離れた場に身を置くことの多い現在、その状況の中で、情緒や命のあり方を求める純文学小説の領域が現代の要請として求められている。この小説はそれに応える作品の一つになっている。

深澤真歩氏の「桃と煙草」の言語感覚は、それぞれの言の中から消えていく。再び探すこともできない。バーチャル世代の社会観や世界観が露骨にぶつけられてきて、あるしかりとした生き方として迫ってくることも魅力の一つだ。会話のおもしろさ、捉え方のおもしろさ、言い回しのおもしろさは、文章のおもしろさとなって、どこまでも流れていく。散文文章の楽しさを備えた希有な才能だろう。今は若さに寄りかかっている部分も感じるが、現代という舞台や道具をいつでも取り込める才気も併せ持っていると思われ、この楽しさを失うことはないだろう。

本来最優秀賞を三人に授賞することは躊躇われるのだが、この三人の傑出した才能には敬意を表するしかなかった。これはまた若い世代の文学への信頼にも繋がっている。この三人の力量は、もつと世に出て行っていいものを有している。商業文芸誌で賞を取るだけの力は十分にあり、それが実現しないならば選ぶ方に力がないというべきだろう。

奨励賞の中山喬章氏の「転生」は、題材は興味深く、人類学のフィールド調査に行った女子学生が、パプアニューギニアの貨幣経済の及んでいないある村で、濃い体験をして戻り、それを修士論文にして就職するのだが、抜け殻のようになっている。指導教員は不思議に思っ、自分も現地にやってみると、そこに彼女がいる。日本に戻った彼女は抜け殻で、真の彼女はそこを楽園として生きている。気

がつくと、自分も彼女と同じになって、抜け殻が日本に帰っていく姿を見る、というストーリーだ。この世には不可解な現象が無数にある。文明を逆照射する鋭さを帯びたこの作品は、インパクトがあり、意表を突かれるが、反文明は零円気や匂いとしてはわかるが、重要なその本質に切先が届いていず、対極に位置する原始生活の楽園性の根柢が希薄になっている。この二つを扱った上で、このストーリーを重ねれば、衝撃性は増しただろう。着想は鋭い。

河村直希氏の「シエアメイト」も鋭利さを感じさせる作品で、同居する相棒が犯罪を起こし、彼を求めて来る人間たちや警察とのやりとりが、スリリングだ。最後に相棒から拳銃まで託されるストーリーはおもしろく、筋の組み立てに力を感じさせる。ただ、この主人公が作家志望で、創作に悪戦苦闘している姿や、性の欲求を蔑み気味に書いている自堕落感も余計で、作品の品格を落としている。難しいが、他にやり方や表現方法があったかもしれない。伸び代のある書き手だろう。

芦田孝祐氏による「その重さの金と同価値な」は、文章の密度と流れに快いものがあり、読ませる力は高いレベルに達している。大学生活の断面を生き生きと切り取って、そこに友情のねっとりした部分と男女間の歪みを組み合わせ、奇妙な交差空間を描き出している。数学科の学生ら

内と外を抽出する筆力に呆然

小浜清志



初めての文学賞でどんな作品が舞い込むのかと期待しながら、一抹の不安も抱いていたがふたを開けてみればそれはまったくの杞憂で、当選作が複数になるとい思いもしなかった結果になった。

今回は選外や佳作の方から選評をする。

「河童の一人酒」アイリス・ニック・クロウ シアトル生まれで十九才で交換留学生として来日し、現在は農家の夫と子供三人で帯広に住んでいるという経歴に目が釘付けになった。荒唐無稽な青エゾ河童の話より日本に住むことになった経緯を小説として書いて欲しいと思った。これだけの日本語が綴れるということは英語での文章も達者であるだろうから、日本ののくらしを米国の人に知らせるのも良いのではないかと一人酒をしながら夢想した。

「大根運び」絃世新土 私がシナリオの講座に通っていたころ講師の映画監督が教壇に立つなり今日は皆さんにてっ

しい論理の飛び交いも、効果的にそれを盛り上げている。しかし数学の美しい解き方を見て感心する以上に、テーマの深さや普遍性を求められた場合、湧き出してくるものがあるか、心許なさを覚える。これはタイトルにも反映されていて、感情の膨らみより物理的な美しさに比重がかかる傾向は、いつか変成に迫られるかもしれない。

惜しくも佳作に留まった絃世新土氏の「大根運び」は、大根の運搬作業に、戦時中の死体の足の運搬を重ねて、平穩のうちに潜在する激烈な現実を呼び込んでいるが、重なり合う結節点が希薄で、連想のうちに留まっていることによつて、虚構の強度が足りなくなっている。着想はいいが、十分な説得力に欠ける。文章の定着性も歩みが地を得ていず、観念的な主張が先立って、流れていない。小説の文章を獲得することによつて、大きなテーマが生きてくるだろう。次回に期待したい。

小説は特に持続力が必要で、今書ける状態も次に続けていいものが書けるとは限らず、今未完成な人も、続けることによつてすごい大作を完成することもありうる。地味な不滅の情熱の持続と努力が、小説創作には必要である。

ここに集まった才能ある若者たちがさらに成長していつて、今後日本文学のさらなる新たな花を大きく咲かせていくことを期待している。

とり早くシナリオライターになる方法をお教えしようと思り出した。皆が固唾をのんで講師の次の言葉を待った。講師は黒板にシナリオライターと書き前列に座っていた者の名前を聞きそれを書いた。そして、連絡先をここに書いた名刺を作ればもうシナリオライターです。明日からその名刺とシナリオを持って映画会社に行くのですと真顔で言った。職業小説家なら出版社に原稿を持ち込むべきです。

「その重さの金と同価値な」芦田孝祐 会話のテンポのよさに引き込まれて一気に読み進んだ。堺と世界を共有できる自分が誇らしい。その重さの金と同価値の世界だからねと打ち明けた後、公園で四本のビールをゆつくりと空けた。小説の膨らみとはゆつくりとビールを飲む時間をどう表現するかではないだろうか。

「転生」中山喬章 未だ貨幣経済が浸透していない地域にどういったモノの動きが存在するのかを調査するというところに大なる興味を抱いた。レンバレンバという山奥の街から更に山の奥にあるヤクロ村での生活が始まる。電気も水道もないのであるから日が暮れば寝るしかなくその分朝は早い。朝食をとると男性は森へ向かい、タロイモ畑とトウモロコシ畑の草取りをして最後に水をやる。金属製のバケツを持って川と畑を何往復もする。

貨幣経済が浸透してない地域でモノの動きを観察する予

定であったが、この村ではモノを所有するという習慣がない。そして、儀式の内容だけを録音して村を去る。そこから、転生と結びつけるように話は進むがこの枚数では掘り下げが難しい。

「アンダーグラウンド・マザー」紅露牙 代理出産という重いはずのテーマをコミカルに描いていて楽しく読めたが読後感は虚しかった。つまり、人間が不在なのである。ストーリーがあってそれに人物を当てはめているだけの作業しか見えないのである。着眼点の良さを生かしきれなかった。

「シエアメイト」河村直希 小説という不毛地帯に足を踏み入れた和希の苦悩から始まる。労働を終えアパートに戻り缶ビールをお酒り小説を書くためにノートパソコンのキーボードを叩き続ける。新人賞の受賞場面を夢想する。だが現実にもどってみればもう不毛地帯から撤退するしかないときさやくも一人の自分がある。遠い昔に私の辿った道を見せつけられているようでせつなく読んでいたら、突然に作品の世界に引きづられた。シエアメイトのキムは帰ってこないが坊主頭の男とスーツを着た女が夜中に現れる。そして一気に物語が展開する。書き出しの緩慢さとは裏腹にスピード感があり読者を飽きさせない筆力もある。構成をきちんと整理すれば評価は違ったものになっていただろう。

時も頭を離れなかった。一人旅を続けてもずっと付きまわってくる。二人をつなげているのはスマホのラインだけ。Nから送られてくる画像を眺める。Nの生活が伝わる映像に思いは乱れる。金持ちである両親と合流して旅を続けながらNの東京で働けるかとの問いに狼狽える。突然、エヌを取り巻く一族が現れる。Nの信じる宗教が頭をよぎる。そして、Nを鏡として己の心を照射する。猫はあまり痛みを感じないよう進化したと言う。偏に、生き延びるために。ならば、私も同じように進化する。

上位三作は驚き

大高雅博



今回初めての新人賞ということ
で、不安はあったのだが、大きな
収穫があったとあって良い。それ
ぞれがかなりの刺激を与えてくれ
た。無論銀華文学賞の作品には円

熟した別の魅力がある事は指摘したいが。

特に上位三作は飛び抜けており、これは驚きであった。

う。

ここから当選作となった作品である。

「桃と煙草」深澤真歩 新橋と銀座の間くらいに位置している小さな喫茶店で働いている私は出会い系で同性のモモと知り合う。いきなりホテルへ行こうと誘うモモは彼氏と別れたばかりで未練がある。しかし未練か性欲かが判らないので、妊娠の心配のない同性と試したいというのが、私にその気はない。仕方なく駅前のフルーツパーラーで閉店まですることになった。夜はバーになる喫茶店ときおり私はモモとの会話を回顧する。不確かなものの上に立つ不安とモモの存在が読者にも桃味として残る仕掛けが秀逸である。ことばのあやつり方が巧みで才気に溢れている。

「光源」北谷ゆり 無音の画面がゆっくりと動く、映しだされるのが何であるかさえ問わない。夜道の静寂を足音だけが乱す。文字の限界に挑むように紡ぎだされる情景はグロテスクなまでに美しくみえる。雄と雌の交わりは肌だけでなく保っていきけるのだ。言葉ではなく指の巧みさと光の動きでも繋がっていきける。万華鏡のように人間の内と外を抽出する筆力に呆然とするばかりだった。生と性の光源を探ろうとする意欲作である。

「赤城休暇」石田夏穂 先週二十八歳になった私はインドネシアの石油化学プラント工事で知り合ったNのことが片書けない作品である。
感覚的な小説であり、ストーリーに余り意味はないが、ネットで知り合った男と思つて会ったところ、女性でありパフェを食べる。匿名性、関係の希薄感、ネットでの出会いの危険性、人生を突き放した薄っぺらな生活を描きがちだが、この作品は違うようだ。題名から分かるように、最初は味覚、それから聴覚、視覚、五感に訴えているところが成功しているかもしれない。

小説家の安部公房は、比喩は最終的には五感に戻さないと伝わらないということをやっている。手元の安部公房の作品を見ているが、例えば「犬はますます興奮して、湿った石鹸のような鼻面を力まかせに押しつけてくる。」「午前七時半……どんな不思議からも、絶対に相手にされれない、蒸留水のような時刻」と、言った具合である。
この作品はこれらの五感にせまってくるものがあるのだろうか。成功しているように思える。

当選作石田夏穂氏の「赤白休暇」は、文章力がある。お互い好き合っているが、家のために結婚ができなくて悩むというのはこの国の何十年前の題材なのだろうかと思う。この国際化した時代にはと思うが、それ故にできあがった小説である。男はインドネシアに住むムスリムであり、大

家族のために給料を稼がなければならぬ。男はムスリムを捨てられない。彼女もムスリムとなる結婚はできない。東京に男を呼び一緒に暮らすことはできる、彼女の収入で男の家族を養うことも可能である。しかし、男は専門職で日本でコンビニのバイトをするよりは、安定している。男と彼女とはかなり大きな賃金格差がある。それが問題なのかもしれないが、女は男を忘れるために旅に出る。しかし、メールを気にしてしまう。これは、政治的な話でも、宗教的な話でもない。どうしても結婚できない女が男を忘れるための小説である。それが成功したかどうかは分からないが、小説は成功している。

当選作北谷ゆり氏の「光源」は不思議な小説である。一昨日、強姦された女が恋人と一緒に警察に行く、それをモノローグで語る。大庭みな子や金井美恵子のモノローグだともう少しヒステリックになると思うが、精霊に犯されたと考える女は客観的な文体で書かれている。

考えて見れば大庭みな子も金井美恵子も、詩人として出発してから小説を書き始めていて、彼女らの小説には詩的な部分があるのだが、この小説は詩的というよりは散文の要素が強くそれが魅力になっていくようだ、一度目は漠然とした感じがあったが、二度目に読むと一つの間にか引き込まれてしまう。この小説は深いのかもしれない。

女か分からないのはマイナスだろう。また、「秉燭（へいしょく）」は恐らくほとんどの人は読めないから、ふりがなは必要と思われる。この小説は題名、内容とも、少し分りにくいと思う。

さて、今回の新人賞において、応募した人の中には何故、これが当選作？ 自分の方が良いと思われる方もいられるかもしれない。そういう方は、もう一度当選作を読み返して欲しい。今回に関しては、少しの差がある。どこに差があるか考えて欲しい。

描出力、新鮮な泡の味、 得体のしれない感性

八覚正大



「赤白休暇」

これは主人公の成長を描いた教養小説である。主人公の女性は、インドネシアの石油化学プラントの工事に出張した。そこでNとい

う、末端の仕事に従事しながら健気に働く現地の青年が好

奨励賞の中山喬章氏の「転生」は伝奇ものになるのだろうか、フィールドワークに行った研究者にまつわるものだが、この結末には驚いた。初めて見る結末である。視点が面白い。ただ、結末が面白すぎるので気になるのは、最近インターネット上に色々な話が流れているという。それを適当に取ってきて別のところに応募する輩がいるということ。そんなことをしてもすぐに分かるだろうし、書き手にとっては実は新しい物を生み出すという楽しみを奪うことでもある。

日本には星新一という、偉大なSF作家がいた。1000のショートショートを書いたという。彼が凄いところは、その全てが完全なオリジナルということだ。そのため、どの国にも胸を張ってそれらを紹介できるというわけだ。「転生」の作家が決してそうだとは思わないが、次も是非新しい結末を考えてください。

奨励賞河村直希氏「シェアメイト」は、ハードボイルド調の作品で迫力はある。ただ、主人公は小説を書いているが、自嘲気味にありふれたお話といっているが、実はこういう細部に気を遣って欲しい。そうすれば、小説に厚みが出ると思う。

奨励賞若田孝祐氏「その重さの金と同価値な」は雰囲気のある作品ではある。ただ、例えば、藤田が、最初、男かきになったのだ。しかし、お金持ちの家に生まれ、旅行を好みバスポートを当然のごとく使用する主人公と、家族を大切にし車もなく、貧乏とはいえないまでも、半径二キロ以内の生活圏をほとんど出たことのないN——その成育歴の差に主人公は嘩然とする。（私が驚いたのは、言うまでもない。バスポートのない人生は、私には考えられなかったからだ。あの十年ごとに更新する日本語のバスポートは、まさに私の身体の一部であるかのように、濁った血のような色をしている……）」

出張から戻り、自分の父母とロシア旅行をする。Nとの違和をなぞりつつ、己の今までの生活を振り返る。（救いようもなく、私は視野が狭かったのだ」と。

そしてNとの行為を振り返り、（あの匂いは、たくさん汗をかいた人間の匂いなのだ。国境も性別も関係ない、よく働き、ちょっと疲れた人間の匂いなのだ」と気づく。（シヤワーを浴びても抜けぬ、独特の籠った匂いは、私に、生きていくと思わせた。こいつと私は生きていて、そのことに良いも悪いもなく、いま、間違いなく生きているんだと思わせた」と。かつて尻尾の骨を剥き出しにしても強かに生きていた猫を思い出し、己をそのサビ猫に投影する。そして進化する決意をもつ。だからこれは、まさしくなかなかの「教養小説」である。

当選作に推したのは、内容と共にその端的にして要を得、かつ自然な描出力に対してでもあった。

（Nは）現場に到着すると、機器ノズルのフランジ面に目を凝らし、傷があれば修繕の手配をし、なければ客先のサインを貰った。その日の指示によっては、蒸留塔の梯子をよじ登り、プラット・フォームのボルトの締め方を、無理な体勢で確認することもあった。何日も、何週間も、何カ月も、物言わぬ熱交換器とか貯蔵タンク……の細部に、Nは真摯な眼差しを向けていた……時には昼過ぎに、事務所脇の喫煙所にいることもあった。そういう時、私は事務所の窓から、やや寛いだ様子のNを見やった。その立ち姿は、横から見ると殊更に薄い。「カマキリ」と私は呟いた。

ある晩、Nはヤマハのクリーム色のバイクでやってきた。私たちの身体は、向かい風の中にいる。時速は、時々五十キロになった。私は右手をNの腹に回し、左手を肩に添えた。……紺のベラベラのパーカー越しに触れる腹は、素の肌に触れている時よりも、実物に近い感じがした。減速と加速の際は、その腹に力が入り、ぐつと固くなった。あんなに痩せているのに……一握りの脂肪が掴めるのは不思議だった。

「光源」

よく分からない部分もある。なぜ誘拐されたのか、そしてという女性。彼女はどこか母親のように接してくれた。お客のジャンボさん。髭を生やした三十代くらいの男。

桃味とか、煙草とか、アイス、パフェ……とかが、その場の淡い感覚を小気味よく伝えては来る。文章はキラキラと撥ね、流れていて新しさを感じさせはする。

「かっこいいゴミ。光より速いゴミ。……あのゴミだってもとはゴミじゃなかったんだ……それが開封された途端にゴミ、と名称が変わる？ 失礼な話だ」(白い今日に倒れ込む。かさぶたを剥がそう)……ただ、新鮮な泡の味、あるいはちよつとした香りの心地よい匂いを嗅いでいるようで、その雰囲気を受けた存在の感触を作者はどう描くのか、未知数の感じがした。

「シエアメイト」

シエアメイトのキムという半ば不在の人物と、小説家志望の主人公。キムの働いていた職場からの二人の人物の訪問、キムは何か不祥事を起こしたらしい。キムのことを巡って彼らと電話や応対を繰り返す主人公。

深夜公園のベンチにいと二人の警官が近づいてくる。そして、銃による惨殺事件の話をする。ある意味、初対面の関係の希薄な人物たちなのだが、それが坂本とか裕也とか、上島とか、山田とか、過去の同級生塚原とか、名前を持つとどこかこの〈物語〉の中で、すつと実在感を孕み、

て警察にそれを訴え、事情聴取される。誘拐され何をされたのか……そんなストーリーらしき輪郭はあるが、殆どどうでもよい気もする。それより、この文体はなんだろう。

一行一行、言葉一つ一つが詩的な響きを孕み、読んでいて目に独特な味わいとアクセントを齎してくる。彼というのも随所に出ては来るが、主人公はこの女性だ。そしてその心身に自ら近づき離れ、ねつとりと見つめ続ける眼差し。

このような文章は今までほとんど見たことがない気がする。(体は辛うじて均衡を保っているが、重心が痛むように熱い。皮膚を失い、内臓が外気に触れてゆくように熱と冷感とが混合する。赤と白が、血と精液が、炎と白煙が、生と死が体の中心で丸みながら形を成してゆく激情と非力の斑紋。脱皮したばかりの節足動物のように、まだまだ柔らかい。しかし、いずれかならず、非情な、硬質な膜で覆われる)

ちよつとまだ、どこか得体のしれない感性の特異な表現化、でもどんな光源を見せてくれるのか期待し当選作として推した。

「桃と煙草」

新橋と銀座の間くらいに位置している小さな喫茶店で働いている若い女性。その彼女の、他者との交流の淡い記録。男と偽って待ち合わせ場所にきたモモという女性。インターネットで出逢った「火曜日さん」という自分のことを俺

でも消えていく。キムは主人公にマカロフピストルを置いていく。それは警察官山田の語った殺人事件の内容と符合するものだった。ヴァーチャルなものと現実とが入り混じって、しかもそれそのものが小説というような構造。作者の才気と文体の面白さは感じられたが、不在の人物を設定することや、小説の中に小説がある構造は必ずしも新しいものではない。

「転生」

大学院で人類学系の研究室に所属する女子学生の主人公。ニューギニア島のヤロク村に滞在し、そこで現地の体験をする。そこまでは中々読ませた、初めは男性かなと思っていたが……。途中で視点が大学の指導教官に変わる。そして「積荷信仰」というものが明かされる。それは神と交信する手段として現代文明にすぎない信仰で、外界からの訪問者が儀式に招かれイノブタの子宮を入れた容器を受け取ると、その人が保有しているものを手放したくなるような暗示がかかってしまう……というもの。

なかなか、面白い概念だし、魅力のある話ではある。ただ、「現地」での徹底した関り描写、主人公の女性の生き方への追及、「積荷信仰」、そのどれも中途で終わっている感があり、小説(フィクション)ゆえの「想像力」を駆使した突っ込みとテーマの展開が欲しかった。

第2回 文芸思潮新人賞 作品募集

文芸思潮では、新しい世代、新しい時代の小説作品を募集します。清新な感受性、斬新な発想、大胆で挑戦的な構想、画期的な文体や文章による表現など、若い世代でなければできない尖鋭な小説創作を期待します。社会の変化や生活の激変の底に沈む人間の声の爆発、新しい前衛的な試み、新奇の感性、海外の体験に基づく地球規模の体験など、常識を覆すパワーの小説作品をお待ちしています。

●●募集要項

募集内容 ● オリジナルの短編小説作品。純文学に限らず、SF、エンターテインメント、歴史小説、推理小説など小説ジャンルは自由。これまで同人雑誌などに発表した作品の改作も可。一人一篇に限る（複数応募者は失格とする）。

応募資格 ● 2021年4月30日時点において39歳以下の者

応募規定 ● 2万字以内。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴じること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取り、コピーを応募のこと。400字詰原稿用紙はなるべく使用しない。使用する場合はA4を用いること。別紙に①応募部門を明記（第2回文芸思潮新人賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム・どちらも要ふりがな④年齢・生年月日（生年月日のないものは失格とする）・性別⑤〒住所⑥電話番号⑦職業・略歴

応募者には結果を通知する。

応募審査料 ● 2800円（郵便局の郵便為替を無記入で同封のこと）外国からは26USドル。

応募先 ● 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「文芸思潮新人賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

賞●文芸思潮新人賞

最優秀賞 ■ 賞状・トロフィー・賞金20万円（受賞者2名の場合は10万円、3名の場合は7万円）

優秀賞 ■ 賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上の場合は2万円）

奨励賞 ■ 賞状・賞メダル 佳作・入選 ■ 賞状

選考委員 ● 作家集団「塊」メンバー

締切 ● 2021年4月30日（当日消印有効）

発表 ● 予選通過者は2021年9月25日発売の「文芸思潮」81号に発表する。受賞作・優秀作は2021年12月25日発売の「文芸思潮」82号に発表掲載。奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

主催 ● 文芸思潮

※主催者から 新しい世代による新しい小説を読みたい。一見平和で、安全に蓋をされている現代の便利な生活のなかでも、噴き出している何かがあるはず。全て見映えよく覆われている中に、もっと暴かなければならない人間の根源的な問題が潜んでいる。それを剔出するような新鋭の作品を期待しています。



「アンダーグラウンド・マザー」
俗にいう、代理母の話、しかも引きこもりの女性主人公。ある意味、かなり現代的な話ではあり、発想には興味を惹かれる。ただ「私はため息をついた。たとえどんな理由にせよ、中絶は嫌なものだ。できることなら避けたい……」（こちらは体を張ってやっつてるのだ）「やはり出産に命がかかっているのだ」……などという表現に、観念的な作り物の感じがして、命を生み出すことへの敬虔さ、疚しさのようなのもが希薄に思われた。
「その重さの金と同価値な」
男同士の友情というか、まだ社会へ開ける前の、観念的な言葉による探り合いの小世界。
評者もそんな時代を経験しているので、分からなくはない。ただ「僕は「セックス」という単語を口にしながら、それが何の感情も自分に思い起こさせないことに気づく」（でも、おかしくないことだけは分かる。他人の数学の証明を見た時と同じだ）「あらゆる連絡が相手に伝わっている確率は二分の一だ」……この言葉論理の自閉の世界から抜け出していく主人公を読みたい。
「大根運び」
信春という主人公（小学校一年）の家族のことが描かれている。興味を惹かれるのはYおじさん（主人公の伯父）

で、主人公をかわいがってくれたやくざである。また、レイコ婆というのが、主人公と同じ歳の頃、戦争中で、大根（人の足）を運んだ……という話は、かなり衝撃的ではある。得体の知れない首長の飛行機や、ラスト、伯父さんも頭を割られて死んでいた、というのもインパクトは感じられる。ただ、それらの描写の才は感じられるが、作者が何を描こうとしたのかは伝わってこない。少年の頃、目撃したショックな「原体験」の吐露から、さらにそれが何なのかを読ませてもらいたい気がする。
「河童の一人酒」
なかなか流暢な言葉の使い方は感じられた。ただ「脱つちゃん」という河童（やせ細った120センチの青エゾ河童）を作り出した面白さはあるものの、どうも読んでいて感情移入できなかった。そのためラストの方の恐怖感も伝わってほしかった。作者は河童を通して何を語りたかったのか？



光源

北谷ゆり

一台のオートバイが近所の角を曲がってゆく音が、耳を掠めた。

近頃になって、外の様子を気に掛けるのが習慣になっていた。冷えた窓にそっと手をあてがうと、微弱な振動がある。窓から少しずらして置いた室外機が作動するためだが、無音の訳は、室外機の底に緩衝材を敷かせたからだ。

家電製品の修理工場で働く彼は、仕事はできるらしいが、割り切りの強い性質で、自分の部屋の家電、備品にいたっても、こわれた箇所をなかなか直そうとしない。

気にならないの、と尋ねたら、別にと無愛想だ。以前彼がこの部屋に来た序でに、室外機の音で寝付きがわるいとかちついた。その翌翌日の夜には、ぶにぶにとした、えらく大判な黒いゴム状のシートを持参して、数分たらずで私の悩みは解決された。

ひたすら褒めちぎっても、無愛想。四人目の男である彼が、思い切り、屈託なく、そう。馬鹿笑いとかじゃあなくて、生まれる前から準備された類の笑顔を、一年越しでも見てはいない。私だけ知らない自責。刺刺しさ。自由な両手を余して足の指で、落としものを摘まみあげる擦れっ枯らし。こういうの、嫉妬かしら。

彼、青っぽい雰囲気まどを纏っている。然有らぬ趣で、ほやほやとうすら青い明るみを醸成するかと思えば、鮮烈でカブトガニの血液のように、たらたらと流れて消えぬ血痕を足どりに残して、肌に触れるものすべてを染めつくしてしまふ。その血生臭さはとくに、雄雄しいんだか、女女しいんだか執着した性欲に掻き立てられている最中は、濃厚だ。

フラミンゴが淡紅色の訳は、エビとか甲殻類を常食する

からと、先日生物学の講義で知ったが、彼といえど、青い食材ばかり口にはしてはいるはずはない。よくよく青い食べものなど、ありはしないじゃん。

直接にあっさり聞けたりしたら、私も当世風で気さくだが、もしかすると、ばつが悪いかもしれないし、引け目を感じるのかも。普通、煮え切れない心情の男って、無言になったり、部屋を出て行ったりするが、彼ってという人は、御喋りになるのが可笑しい。

今夜はもうずいぶん遅いはずで、こうして窓ぎわに立ち惚けると、漆黒の幕の隙間から入る微かな夜気が上から下へと、体を徐徐に保冷しはじめ。

いつからここにいたんだっけな。そう。丁度いま、上着をとりしてきたところで、一緒にいた彼は、玄関の向こう側で私を待っているのだ。小体なマンションの一室なのだから、仲良く二人で出ればよいものを。嵌め込み式の戸棚と一体化した寝室は、安っぽい装飾はなく、カーテンとベッドだけを道徳的に設えている。昨年、大学の友人らとバリエ島へと旅行をした土産の、木製の丸い置き時計は床に置く。脚の短い寝具に、わざわざナイトテーブルは不便だった。

隣接する雑居ビルは灰色の外壁が満遍なく剥がれおち、薄皮色の下地が覗く。あんまりにも散文的な画面であるから、日中はカーテンを閉じる。夜明けには少しはなれて鏡

の代わりに寝巻を映し込むことも暫し。

額をつけるほど近寄れば、ペランダの排水用の溝の位置は、うつすら判る。三角の白い花卉がへばりついている。どこかの公園からたゆたってきたんだわ。窓を開け、半身を乗り出して目をこらす。大概、人って猜疑とかアナクロニズムが結局は安心するのだと思うけれど、千切れた白い花卉が、湿気た紙みたく、端折れていないから、どうにかして窓を開けたかった。

蛾、である。室外機のうるさい寝室はよくても、付着した蛾の残骸が壁の向こうにあるなんて、彼には知られたくない。蛾、だね。とても眩くだろう。ちがう。

私だつてね、湖畔から歩いてほどない木造の一軒家に住んでみたいの。でも、それには自然への愛があつて、慈しみを受けて、赦し合わねばならないのだ。こんな、虫の死骸と添い寝する姿に羞恥心を煽られている私ではいけないのだ。無になるって、悦びを感じない習性になることか。彼以外の男でも、易易と寝るように。だとすれば、生き恥も同然の贅沢だけれど、獣の習性なのだから、そう深い意味合いはないね。

私は、まず、どうしてもあの、息絶えた微微たる天工と赦し合いたい。有色な蝶たちの、優雅に舞う姿を見ず、羨みもあらず。言葉にならない言葉で、教えたい。夜霧のうごかない貴方は、白っぽい花卉のようだ、と。

半屋外の、屋根の下に、割と抜けた景色に体を向ける彼は、五分も待つてはいなかった。あり合わせの洋服に、はおったウール織りの厚手のカーディガンは、中古で買ったものだ。元は高値だろうし、裾やかな手触りだが、着膨れするから多用はしていない。

六階建てのマンションの、三階への行き来に、彼はいつも階段を使う。長身で、筋肉質なほうで、どの関節も、すべて隆隆と堅い。勢いよく生えた伸びやすい短髪は、風呂の後しか取まらない。毎度、彼が自宅へ帰る際は、生乾きの髪だけれど、今夜は、戯れのあとなのに、そのままだ。むしろ、私の唾液に、間接的に彼自身の唾液も混じって、耳のまわりに付いているから、ちよつと淫靡だ。

どうもすつきりとしらない。戯れきつたあとの然るべき颯爽の感じはない。どちらかといえば、怏怏おうれうれとして、切切たる寂寞を引きずるのは私のほう。だから、彼を伝って、自分の一時的な気塞ぎを改めて見直した気がする。

彼の手は、煤やら石油やらで汚れて、爪の中にまで滲んでいる。顔を撫でられると、つんと鼻につく臭いが残る。エロチシズムな香水じゃあるまいが、スパナに錆び付く鉄油の臭いが漂うと、どこであつても扇情を覚えた。

黒ずむ指をじりじりと体と這わせる手付きは、鉛筆で無

れる指先だろう。

それに比べて、私の理想は、彼を覆っている蒼穹からじつくりと分化する瀝青の温度を表しているのだ。なにが違うのか。精霊の生々しい肉体を覚えてるが、彼のものは、彼だけのもの。同一にはちがわないのだ。だから、私は男心というものを把握しきれていない。

彼は、髻の折り込みや、肉道の盛り上がりでの微細な違いを見極める特性には優れていたのだ。なおさらどのように違うのか知りたい。だが、彼は実際、答えてはくれず、いつも電話先にいる見習いへの注意と同じ味気ない口調で、過ちの日時や、どうやって逃げたのかを詰問してきたのだ。

熱さや痛みを感じるのには皮膚そのものではなく脳なのだと、まるで無知な彼に、浴びせたい気持ちを押しつつぶして、私は目を瞑ったり、見開いたりを繰り返した。唯一覚えた動作のように。もしくは唯一忘れない動作……。

絶え間ない口説きが続くほどにおもう。彼は、なぜこうも誰かに指図されるよう生かされてきたのかを。そう考えながら、女らしく形成されてきたぬるい羊膜をぐつと奥へ沈めた。

一昨日の夜よ。と返事をすると私の、ではなく彼自身の一昨日の記憶を必死に呼び戻していた。その日、私たちは離れていた。二日前の夜、私は、彼の中でどのように佇み、

造作に線を引くうごきに似ている。焦らすと思えば、強く掴んで、川面にうかぶ、あめんぼのように裸のあちこちを飛び交う。長たらく弄られるのも良い訳じゃあないが、それじゃあ少し物騒しい。

そうそう。彼は、まぐわいの間も、饞舌だ。腹立たしい時と猥りがわしい時。どちらも欲の素地が同じなのだろう。気温とか、天候とか、情欲のさじ加減とか、食べたものとか、乳房の張りとか、そういう機微を無視して、性交のたびごと無骨で荒れているから、それは私がぼっかり虚しくなるのも当然でしょう。しめしめ、今の君なら分かるんじゃないの。

とは、胸中でほくそ笑むものの、彼は上に跨られてはいないし、女に指示されたのではない。夜気が染み込んだ、冷えたベッドで、入れていたものを出し抜けに外して、他の男と寝ただと、かんしゃくを起こした彼だから。それから、淡淡と言いつ返した。精霊に犯されただけよと。……精霊だの雪男だの誰が相手だろうとも、自分の女が別の男に寝取られた非常を拒む代わりに、僕らの交わる感覚が前とは違うなあ、と彼が言った。控え目な口ぶりにしては、安直な男の肉体なのだ。

彼って人は、おそらく感受性を大胆に抱えない代わりに、坦坦と電気器具の修理を熟すこな日々を生きているのだから、ここでいう感覚とは、弛緩したネジや紐線の剥落に触

何色の洋服を着ていただろう。次に会うまでのまだ汚れていない欲情は、彼の目、口、性器、指先のどこに保留されただろう。

なぜ黙っていた。と彼は憤る。話す気はあったのか、と彼が聞いたので、言いそびれたことについて、ただ時期を逃したとか、言い回しに悩んだとか、念を押す意味もわからないままに、口数を利かせてみた。値踏みとでもいうのか、未知の国から、悠悠と、性急に、海面をなぞり漂した現実そのものに、脚色や闇を加味させるのは、ちつとも安易ではない。そもそも、私でさえこれ切り初めての体験であるし、あまりに白昼夢に入り込みすぎて、体温は未だ僅かに昇降する。

……ほろにがい緑葉、気高い花香、擦れる枯葉を踊らせる、凜とした寒風。万物に色を与える、神神しく荘厳な夜光……。

明かりの消された寝室で話し合ううち、私は一昨日の夜、大学の友人数名と夕食に出かけた帰りぎわに、知らない男に誘われていたことを伝え、彼がこのまま警察署へ向かうと決めた。彼が先を行き玄関から遠ざかってゆき、初めて気が付いたが全く丸みのない、角張った階段をゆつくりと下り、駐車場へと降り立った。

営業用の修理道具が後部に積み込まれた、彼の黒い箱型車の中で時刻を確かめると午後十一時を回っていた。人氣

の欠いた道を、静かに車を走らせていると、ぶつぶつと口から泡を吹くように彼は話しはじめていた。精霊ってことばは出さないでいてくれ。と彼が助手席をちらちらと余所見しながら、語尾を強めた。私は、その澁んだ眼差しをほとんど凝視をした。お互い困惑している。

バリ島へはただの一度、旅をしたが、欧米と北欧の違いも詳しくなければ、民族音楽はとにかくすべて粹だね。という野暮さで、あの夜に現れたのは、母語もあやふやで、つかみどころがない。どことなく精霊のように見えたという他に筋道のない私は、ふん。と腑抜けた相槌を打った。

彼にこんなしなかつめらしい行動力がなければ、私の体の事情など真つ赤な他人が取り調べることもない。私の体験した夜だというのに、良俗な人たちの顔色を気にするとは一体どうだろう。けれども、わがままに車から降りるには急ぎ立てる理由というのがない。それどころか、たった今横を通り過ぎた車の単調な響きが、波打つようにしてよく聞こえて、夜の海の塩気を匂わせてゆくのが、すごく良かった。そのうち、自分にも、不能の男のような醜さのあることが、はつきりとわかってきた。頭の中に月並みの嫉妬が、浅海に覗く長たらしい海藻のように、ちんたら浮沈しているのを、どうしようもしない。

夜食を買いに行くのではないのだから、財布を部屋に置いてきた。かわりに紙袋を棚から持ち出した。慣れ親し

彼つて寝惚けた表情をほんとうに見せない人だ。仕事のない日も、朝六時には決まって起きるらしいが、ほとんど異常だ。なにせ私なら九時に起きたら早すぎるほど。

一回きりの彼の寝顔を観る機会を逃した。それは二人が泥沼のように、絡み合ういとなみを終えたあとのこと。途端に崩れおちるほどの疲労と、冷房を効かす手間を惜しんで汗だくになった体の体温が下がり、何も語らず眠り込んでしまったせい。ある盛夏の夜の密やかな蚕行。

遅い時間に部屋に来た日でも、朝を待たずに帰ろうとした訳を聞いたことがあった。ここより一時間ほど離れた地区に、彼は十年以上も変わらず暮らしている。国道沿いに構える修理工場の群に挟まれた、寥寥と広がる空き地に近接した事務所の二階に従業員の寮が作られていた。一人部屋などなく、私を連れていける訳もない。遅刻は厳しい減給と事務の残業を課せられる。こういう真実は如何とも嘘くさくて、藉口じみている。すると、こんな猜疑を孕んでしまう。つまりは、私が、清楚で、淫奔な女子大生だからじゃないの。

保守的なのはうぶな顔立ちに限り、弾力に富んだ不徳な体躯を随えるジレンマを男はどうするのか。出口へと直流する銀の汁液を塞ぎとめて、いかかわしい方向へと艶消しの灰汁を漏らすのだ。成熟しているがまだ学生。学生ながら希有に老成している。どちらも堪らないようで、彼の妄

のない道順を走る彼の運転はぎこちない。緩いカーブを曲がるたびかたかたと、脛に当たる紙袋の中には、洋服が一式入っている。靴から鞆まですべて一昨日、身に付けていた。

小さく折り込んだ下着は型も色も同じものをいくつも持つており、一昨日に洗ったものかどうかわからない。健康的な舌のような浅紅色。彼の突発的な性欲に負けて、この車の中で同じ下着を何度脱いだことか。

無人の歩道ばかりが目立って煩雑な地球らしさを失したような、暗く艶やかな道路と調和すべく、息を潜めた青白い頬が気の強さを示す、彼の横顔。

私つたら、典型的な自分にはないものを持つ人に惹かれる質である。童話じみた丸顔を隠すために髪を肩下まで伸ばして、なお化粧で陰影をつけなければ外出など億劫であるから、決して痩せこけてはいないが余分な肉のない彼の頬を眺めると心が落ちつく。掌をそつとあてがうとびたりと吸いついて、隙間がないのだろう。そんな子ども騙しは、きつと怒られるけれど。

眠くないの。と尋ねると、そんな場合じゃあないだろう。と低く呻った。そのまま二回ほど、間を置かず私の顔を見た。おそらく、そろそろ日を越す時間から眠気を心配してのことか、果てそびれた苛立ちからか。それとも今、我が我が向かっている要件の当事者意識を確認したいのか。

りな追求を底知れぬまで抉ってゆく。姿形は全く異なる私たちだつて、思う病は同じだわ。性欲が炙られるたび燃えつきるまで、不安が欠片もないのはこの色づいた歪な一体のめぐみそれだけだ。彼のいやらしい癖を具現化するのに適している私も、こうした気の弱い自分を好いている。

目的の場所は、ようやく前方の右手に見えてきた。最後の青信号を待つ間、彼はマッチで点火した煙草を、窓の外へと吹かしていた。名刺代わりに生産した夥しい数のマッチ箱が事務所に余っているらしい。呆けた事務員が桁を間違えて発注したと、いつか彼が教えてくれた。

私の前で、煙草を手にとるのは、暫くぶりだった。ポケットの中で拉げたマッチ箱がダッシュボードに荒く投げられるのを、目で追う。木軸のたんまり詰まった小さな箱は、定めたように張り付いて、とまった。

彼と私、その日かぎりの情欲を沸かすには、互いにひとつ、根拠があればいい。気がつけばいい。あとは、目を瞑りたいことも、もつと覗きたくなることも、いずれは切実に訪れるのだから。

多分、恋人が十九だという注釈を、一回りもちがう彼は必要としない。けれども、噂が知れると平生異性に飢えた男の多い職場に居辛いのだろうとは察している。この人ずつと寂しいのだ、とは分かっている。ただ、その孤

独がまた、私の体の奥の、ざらついた断面を擦り、熱く燻いぶしてやまないということも。

僕はすぐ隣の部屋にいるよ。と彼は、律儀に言った。私たちには、それぞれ一人の警官が割り当てられた。彼には男性の、私には女性の、と。男は背格好が彼によく似て、全く違う環境で生まれ育ったまま、ひとまわり歳を取ったようだ。

性犯罪を担当している女は、背は低いが、筋肉と固そうな脂肪を身につけていた。どこまで歳が上かは判らない。なめらかな黄白色の壁が近く、かめむし色の不健康に着色した机を挟み、座った。

女の警察官は、記録書をひろげながら、一昨日の詳細を求めた。壁の向こうの彼も、大体同じ質問を受けていると思うが、どこまで具に答えるか、私たちは相談していない。親しい二人が、隣り合わせの部屋で、同様に弁明する光景を甚だ滑稽と感じつつ。起きた何をも知らないこの人達に、いちから言葉を挙げる面倒が、紫煙の残り香のように、今更めいたのだ。どうでもいいのだけれど。うかつに口から滑りそうになるならしなさを堪え、秩序を、節操を、辛うじて安全な痛みを、同情に似せた恋心を、今は保ち続けなければ。

に体同士をぶつけ合うことの結末の幸か不幸かを、あくまでも私に委ねた、突き離れたような目つきだった。

我に返ったように、急に眠気が拭かれて、再び周囲を見回した。此処はあくまで簡素な室内で、肉感的な要素が乏しい。私の寝室もそうであるように。

女は、女同士によくある、不可視な共感を覚えたのか、口火を切って質問をなげた。この子は単なる内気な女学生だと、決めつけた口調で。

たしか、友人と別れたのは十時頃のはずだ。駅までを歩く道すがら、誰かが近付いた。顔はまったく見えなかった。なぜかって、それは、後ろから近付かれたから。

女の慣れ親しんだ台詞は、ひとつずつ他人行儀になり、いつしか警官らしい、妥当な物言いにかわった。あなた、よく声を掛けられる方なの。と、思えば女同士の口調となる。ゆつくりと、深く頷いた。私たちは友人ではないし、しかるに情もないのだから、謙遜は余計だ。それから淡淡と答え続けた。

見えない影は大きくて、彼奴は地底を這うように低く厳めしい声を出した。はつきりと聞こえたのに、単語が分からない。私と彼奴しかいない、細長い夜道に霧散してしまいいそうな言葉を、知りたい。危険を感じ取る余裕を忘れし、その危さの秘密を侵し、越えてはいけない境界線に踏み出す。彼奴に近付いた時であった。あ。い。再び、あ。

腰を据えて、悩ましげに顔をくもらせる私は、真摯だ。なかなか言葉が浮かばない私への、警官の台詞は女らしく、友人気取りだった。

彼とは、いつから付き合っているの。結構、長いのね。素敵な人ね。私ははにかむでもなく、釣り合う微笑みを浮かべた。

今日はずっと一緒にいたのかしら。ええ、ついさっきまで抱き合っていたから。とは口を噤む。彼が自身のものを挿入し感じた違和感は、こちらの体調がすぐれないというありふれた答えにすり替えておいた。隣の男たちが交している会話の真実味は知らないが。

思春期の少年たちのように、明け透けに女性器の名を連呼して賑やかなのだろうか。それとも、決して突かれない核心の外周を並走しながら互いに脱落を煽動しているのだろうか。彼ってあまり話をするのが得意じゃあないのに、平気なの。涼しげな横顔が、途絶えた後ろ影は、不意に目をわずかに潤ませた。

警官が私を疑う様が震んでいる。ちがう。誤解しないでちょうだい。潤みはしかし、すぐに干上がった。女の空虚しい視線で、これは絶望的な湧水ではないのだと気付いた。警官からは、まるで野蛮な営みを終えた後の彼に似た、人を哀れむような冷ややかな眼差しが、私に当てられた。彼の表情が鮮烈に眼前に描き出された。愛情を打ち砕くよう

い。四度目にして聞きとった。か、わ、い、い。

顔を見ることを阻む私は怖れているのか。礼節を守りたいのか、違背したいのか。彼奴は黙り込む。私も、ものを言おうとしない。

体は辛うじて均衡を保っているが、重心が痛むように熱い。皮膚を失い、内臓が外気に触れてゆくように熱と冷感とが混合する。赤と白が、血と精液が、炎と白煙が、生と死が。体の中心で激情と非力がゆつくりと斑紋を成して合わさってゆく感じがする。脱皮したばかりの節足動物のように、まだまだ柔い。しかし、いずれかならず、非情な、硬質な膜で覆われる。

私の体は、この真ん中でどくどくと混合をつづける球に向かって、四肢がだんだんと縮んでゆく感覚がわかる。支える脚も、しがみつく腕もなくなり、人魂のように。ただ虚空に浮んでいるのだ。いよいよ意識さえもうすらいでしまつて。

目が覚めて、手足の感覚をあいまいに捕まえる私は、仰向けに寝ていた。汚れた空気をかわして、清い空気が心臓いっぱい満ちる。呼吸は一定の間隔のまま、ゆるがずに、もつとも穏やかな数値を保っている。なんて心地がいいのだろう。あの喧騒はどこか遠くの、罪深い悪人たちを寄せ集めた国へと葬られたのだ。ここはとて安らかな、

静かなところだ。すると微かな音が耳につたわりはじめた。しゃんしゃんと、華麗な打楽器が鳴りひびく。ひとつではない。高貴な輪唱。真鍮の鈴、青銅のガムラン。祝典の始まる合図の予感がする。皇室の結婚式か、神仏への礼拝か。高尚な身分の人々が醸し出す甘美な花香。練り香がただよう。伽羅と白蓮。ひなげしとバラ。異国情緒へ誘って。古典的であるのに古めかしさのない。包まれた官能を磨く。愛の香り。

深愛などどこにもない、終りのない安らぎ。これほど清澄な空気に満たされながらも、私の心には軋みがある。それが貴いものなのか、瓦石に等しいのか、わからない。

しかしこの脱力に、私はもの悲しい。ずいぶんと、長い間知らぬ、真新しい場所に寝かされている。暗がりと輝きの分別がつかないのは、光源にあまりに近付きすぎたからなのか。目を開けているかをさえ、知らない。

もう、しばらく一人きりなのだろう。生きた心地を失いそうな私の目は何を映す。見る私。見ていない私。どのみち、ここには無意識の視界がある。ものを映して、ものを映さない目の玉はここから少し遠い。ちょうど、はがゆくて、待ち遠しい距離に。

にわかに、私は体のどこかを痛めているのだと悟った。だから、助けを待っているのだと。おねがい。ここは、一人では生きてゆけないから。いいえ。生きてゆきたくなくて、待ち遠しい距離に。

きつと淡い黄褐色の光は、言葉を表さない彼奴のむげない情動なのだ。その情緒に富んだ光は、冷酷にばつさりと闇に切り替えない。彼奴は頻りに、喉を詰まらせたように咽頭を鳴らし、激しく沸き返る喜びが伝わるまで時間を費やしたがっていた。灯が陰を、陰が灯を染色するようになるまで。膨らんで、縮まって。

私の裸はぞくぞくと冷えてしまいそうで、ぬくぬくとした光線を浴びせてほしいと願った。頼みごとを上手にできる性質ではないほうだ。言い換えれば、それは何かを願わなくても、ちゃんと生きてきた証なのだ。

兄弟はおらず、小さい頃は親しい友人がいなかったせいで、自分と比較する対象というものを全くというほど知らない。世間的な不自由がなかった。それがなんととはなく分かるようになったのは大学に通い出した頃だった。今の友人たちは、あんたは生真面目すぎると、指を指す。そうかなあ。と都度、ひねられる。現に、そうしてうまく言い返せないのだから、私は真面目でも誠実でもない。彼女たちは知っているだろうか。私が、普段、恋人とどんな風に営んでいるのかを。日が暮れた駐車場の、車の後部座席で、

のだから。

刹那に寂しさを知った。孤独は、もっと、永遠にも近い果てにあるんじゃないの。一体、ここは、病人を治療する施設なのか。ただ、私の痛めた体は鈍くて、何を定める力もない。また、ふいに瞼のあたりが賑やかさを感じ取る。光源がゆっくりと離れていったのか、遠くからこちらに気付けて近付いたのか。

それは、ほどなく近くにいて、しずかに、点滅していたのだ。私の心は、明るみに安らいで、陰に震えた。どうか、明るいままでいて。私は乞う。

優しい光は全身を照らした。皮膚は均一に温かい。うすうすと感じていた顔のあたりから、漲る胸を通過して、面妖な透き目、健やかな脛、控えめな爪先へ。

私は身体、そのものだった。衣服をまとわぬ身は、気高く、繊細だ。けして傲慢ではないのに、恥じらいに嘖まれはしない。よかった。生きてゆくね。まろやかな光に誓う。私の体は、どこかが痛んでいる。けれども視界が鈍いために、すぐには確めることができない。痣とはちがう、もっと生々しく肌が擦り切れたような怪我だ。きりきりと痛むし、はつきりと言って、寒い。

光がほしい。わずかに赤味を含む、温暖なそれを。その光が肌にあたると、とてもあたたかいのよ。だんだんと、光は知能的であるように、私の希望に添って通じ合うよう

下半身だけを露にしたまま彼に抱きつかれていることを。彼の手に口を塞がれて窒息しかけていることを。私はそれを望んでいるのではなく、許している。だって、目は血走るし、手足も痺れるのだから、好みはしない。

ただ、私を虐めたいと暗に匂わせるときの彼は、切ない。お前をいたぶるしか生き甲斐がないのだ、と心が訴えている。そう懇願する術無さが、どうしてもいとおしい。私という女は、えぐみを含んだ感情を黙示させたくなる衝動を、掻き乱すらしい。そう思うきっかけは小学校の卒業式だった。美術の授業で描いた空の絵が、下手だの、気味わるいだのと言いつらした生徒たちを叱った先生がいた。それから、何年もずっと好きで、告白もした。式の始まる前に、講堂の裏の、日光の射し込みが美しい待合室で、先生は私の写真を撮りたいと願った。式の間中、私は寵愛を受けた喜びで感激していた。

黄味帯びた、丸い光は勢いを増しはじめた。これまでよりいっそう激しい光明。灼熱ほど際疾くはなく、温むだけでは意に満たない。本当は、わがままな私。けれども同じくらい我慢強い私。どちらの俗情も満たす光量を希う。

息絶えてしまいそうに熱してちょうだい。でも、一線を越える自由までは与えない。操るのは私だから。

じりじりと裸は照らされて、刺すような痛みさえ覚えた私は耐えられず叫びをあげた。荒い声を出すと、意識がす

こしばかり、確かに戻り、薄目をあけた。人形に縁取られた偶像が目前に浮かび上がる。頭と胴体の輪郭をなぞってみようと、腕を回そうとした。輝く偶像は影を持たない、発光体なのだ。

胴体が分離して、真ん中に支柱を残し、左右に開いた枝の先はそれぞれに、五本歯の備中鍬を現した。凄まじく鋭利な指だ。先端まで細やかに煌めいた指。両側から私の目を覆うべく、伸びてくる。しかし目を襲いたいのではない。逡巡な動きは、引け目を感じている様子であった。

ああ。私はこうして無骨に裏付けされた脆さが狂おしいまでに、好きだ。そっと、目を閉じた。もう、貴方の正体をあばく眼差しは捨ててしまおう。すべてを任せようとして、まんべんなく、熱れた、無防備な裸体を晒す。貴方は私の裸をどう思うだろう。ごまかしのない、従順な、しかし甘ったれた裸を。人生のほとんどを甘んじて生きてきた女の肉体を。

首筋に光が纏わりつく。平気で外気に触れているのに、淫猥にだらしない首。光は、熱い吐息のように湿り気を含んでいる。生身の男に吹き付けられた息は、さむぎむとして、不快であるのに、今はなぜ、心地いい。

腋の下の窪みがじんわりと汗ばんできた。背中や、蒸れやすい腿の間にまで。光は脳全体を照らして、胸先へと向かって二つの円を描くように分かれた。暗がりには、乳房だ

ものが混じっている。しとやかに整った、肉の奥に収められた実から漏れ出たもの。その健全で、ふしだらなところみを垂らさぬよう、力んでみせた。しかし、ありとある大事な感覚がまだ曖昧のままだ。隠しておくべき場所ばかりが、こんなに鋭敏で。

だらしなく伸びた脚へと、光は忍び寄る。触れていないのに、触れられないのに滑らかな光。螺旋を描くようになくねと下る。光線をなぞりたい。偉そうぶつてもこんなに硬いくせに。と罵りたい。貴方には聞こえないのだから、私は堪らない。

光は、腿のつけねの小さな水溜まりを浸って、細い隙間に届く。波状にうねったり、細切れに突いたりする。珍奇なうごきごとまってしまうと、私は狂う気がした。

光は、濡れそぼった、怠惰な一片を狙って、ぐるぐると巡回を続けた。その猷身的な行為に、私はどう応えればいいのか。いつもの恋人なら、私が狂う寸前まで、あらゆる屈辱の言葉を吐く。その代わりに私は、叫んで、時に泣いて、極限に痛むまで耐えて、果てるのだ。

もし彼だったら、さんざん虐めたあとに、とりわけ優しさを垣間みせはしない。のど越しのいい苦痛を私が望まないので知っている。

光に攪拌された肉体は、火照りなど疾うに越えてひび割れそうなほどに、高揚している。頭で理知的な狡賢い企み

けが照射される。二本の光は、照らす先を解すように、ゆっくりと強弱をつける。癖づいた、嫌がる素振りをしてしまふ腕が振れるのを、耐えた。寛大な、恵み深い光は、ともすれば、感受性そのもので、ささいな擦れ違いに、衰弱させてしまわぬよう、私は自身を戒めた。

光を想い、情にほだされてゆく。こんな慕わしい自戒でさえ、疑うのか。ちっとも大胆ではなくて、疑り深いのは、自分を守る為ではないはずだ。何から生み出された訳もなく、もう既に自分だけが存在していて、孤立しているのだから。

貴方は悔しいのよね。自分が放つ光が、誰かを焼き尽くしてしまわぬよう、けれども、凍らせてしまわぬよう、それだけを、絶対に、疎かにしない。貴方は、ちゃんと優しく、純粹だ。私はちがうけれども。

胸の突端が、熱いからなのか、恥じらいからか、固くなってゆく。光は執拗なほど、長く照らしつづける。私が悦んでいることが、まんまと、ばれているのだ。こんなあからさまな反応ならば、嘲笑されたって惜しくない。それでもなお、植え付けられた癖のように、体が歪む仕事を恨みさえした。光は、揺らぐ胸を同じく揺らいで、追う。

責められた突起は、心臓に近いためか、異様に熱い。薄い皮膚の下で、赤赤とした情火が全身にはびこる。汗が粒となって肌を伝う。腿の付け根に滯る液は汗だけではない

なんてやめて、ただ、快楽の為に肌を擦れ合わす。ほやほやと、柔らかい。こわばりをとがしてゆく。激しい感情に疲れ切った体を慰めてくれる。

生傷が新しい皮膚の膜を生む。ほんのり桃色がめでたくて、うつくしい。このまま、甘い、冥加の光に溶け込むことができたなら、幸せかしら。しかし優しさに飢えていない不貞なこの裸体は拒みたがる。錆びた声を荒げて、俯せた。そして、同じくして、果てた。

仰向けのときは、気がつかなかったが、うつ伏せになると、景色はまたちがった。偶像に化した光はもう消えただろう。顔をあげた先には月が見えた。琥珀の円は、やっとこちらに気付いたのかと、幾らか、不満げに浮んでいた。

ふたたび、仰向けになり、仮眠をとるまでもなく、しばらく空ろであった。暗紫色の周囲の一角には、のべつ、まいる月が揚がっている。他に形を見定められないのは、ものがないからか、思えば寝室と眺めがとても近い。

とても暗い夜と、それでもない夜があつて、いくら素朴な景色が好みとはいえ、真つ暗闇はさすがにおっかない。寝室のカーテンを閉めても、せつかくの暗夜の透明感がそこなわれるばかりで、部屋は干涸びるようで、なにより暗さが代わり映えはしない。

そんなときは、玄関の明かりをともした名残りで、心を

落ちつかせる。寢室へと戻る姿は情けなくもある。電気、いいかげん取り付けたらどうだ。と彼も言う。泊まりはしないくせに、だ。これでいいのよ。と嘆いてみせる。早く眠りにつきたいだけなのだ。

我に戻ると、私は服を着なければいけない、とようやく気がついた。もがくように、手で探ると、頭のすぐ上で服に触れた。アクリル繊維の安価なワンピース。丁寧に畳まれた服を、真似するように丁寧に広げて着直す。この服は彼に一度きり、誉められた。淡い水色がきれいで手触りがいいと。そうね。まにに機嫌がいい日の彼みたい。

下着までをきちんと身に付けた私は、幼子の顔ほどの小さく円やかな月の照らす先に、人影をみつけた。背を向けているが、偶像よりかは鮮明に人らしい影を。

急に、人恋しさが溢れた。人影に差し出された手を握り、後をついてみると、景色は少し明るみを増してきた。都会的な建造物は一切排除された、森林。外灯もない原始林だ。葉も生花も朽ちてしまつて、樹木の群れは夜気に同化して、一帯は、鉛灰色の海だ。しつかりと手を握る人影は互いを既に知る素振りであるが、流浪人のように目深く帽子を被る為に顔立ちは見えない。

頑丈な肩をして、見たことのないほど、大きい背中に、私はあつてないような視界を、遮られる。人影はとても速く木立の間を抜けてゆく。幾度も足先に引つ掛かる。赤黒

話らしき会話はしていないだろう。彼の言葉は独白じみていて、それだけで成立しているから、あいづちは適当に済まされる。気障とまではいわない。朴訥なせいで、くだらない一言で、こつちが妙に恍惚としてしまうことも、ある。

騙されていると、思う。懣^{なまじ}の愛が嬉しい。聞きたくないならそれでいい。口を塞ぎたいならそれでいい。私たちは突き上げる感覚を隠しながら、互いに自由を望んでいる。彼と深い話をするようになったら、それが別れの合図なのだから。

この取り調べ室の扉は閉めきられていない。罪人ではない私への気配りだろうか。ならば、洗い浚い恥ずかしい証言をした私を誉めてくれやしないか。彼の言いつけも守った私を。

現場検証を終えたという、男の警官が二人連れで入ってくる。そのうち、年をとつた方の男が、私を見て作り笑いをした。

女の警官は役割を担い切つたのか、質問の追加もないうちに去り、二人の男が正面に座りだした。彼女はもう何も聞かなくてよいのだろうか。感想すら述べてはくれなかつたが、不調な会話は慣れているから構わない。できれば初対面だから、誤解のないように成るべく的確に話し合うのがいいが。知らない者同士の、再び話す予感がしない確率

い、浮き彫りの血管だ。規律のないそば道を迷わないのは獣の嗅覚かもしれない。倒木が沼に沈む軋みや、地中深く眠る幼虫の蠢きや、餌に飢えた野鳥の瞬きを想像するのだろうか。何故、貴方は恐れない。私はしがいない人間だ。

朽ち葉や立ち木の色相がわかる。見上げた大樹の、重なり合う梢たちが、夜空につくつた針ほどの穴。そこから月光が差すのだ。

しかし、暗くてやはり歩けやしない。私はどこまで付いてゆくのだろう。普段なら、寝ている時間だからか、疲れてしまった。

こんなあからさまに直向きな、忙しない散歩はこの辺りでお終いにしたい。続きはまた今度にしましょう。一緒に眠つてもいいんじゃない。蛍光灯のネオンが遠くに見える。懐かしい都会だ。懐郷に夢うつつている。人影は私から離れていった。夜風が、枯草の踏まれる音を耳元に運んだ。貴方は知らないのだろうか。あの都会に、私の恋人がいるのだ。

私は努めて彼との約束を守つた。女にどう疑われようが、仮にも精霊とは言っていない。車の中で、確かな返事をした訳ではなかつた。そういえば。

私たちは、端からみれば、いつであつても、ほとんど会

はなんだ。

彼がまだ恋人ではなかつたとき、修理済みの電気ストンプを運んでもらいながら、垢抜けた内装のわりに眺めが勿体ない、と二、三の余談をした。見えない方向が良い景色じゃ意味がないですね。と笑つた。懐っこい顔付きをした彼と、次に会つたときはどんなことをするのか、互いに考えていた。

彼が口下手を演じたがる癖は、一緒に過ごすにつれて、しつかりと味わつた。今は何をしているだろう。警官に心安く話している姿を思うと、また泣けてくる。妬けてくる。相手にするのが男でも女でも。ぶつきら棒な素振りを保つていてほしい。鉄の錆びた、油染みた仮面から、不良品だけを覗いてほしい。恐いのか。望み通り生きる人間に、なだめられて、薄情ばかりではいられないか。私が貴方にとって、不実の証明になつてあげるといふのに。

ああ。温かいのか冷たいのかわからない涙を堪えることに必死だ。顎が震えてしまうのを、指で押えて隠す。警官は、私を見ると数回と深く頷いてたくさん同情してくれた。こういう男は好きに生きてゆけばいいのだ。

思慮深い警官は、私の証言と現場の様子に齟齬が生じると、訴えかけた。君がさらわれた道路は、確かに森へ通じる崖に面している。崖を登り切ると、原野があつて、倉庫がある。廃れた倉庫は、がらんどろであつた。煤けた換気

扇が外気にゆつくりと奇妙に回転していた。原野の奥は、夥しい数の枝が地面に埋まるように重なり、月あかりも射さない暗がり。は到底、進行方向などわからない。警官らは、念のために一人を定めた地点に待たせたまま、もう一人が綱を樹木に括り往復をしたそうだが、方向を間違えば、先は荒れた森が広がっていたと、恐れていた。なにしろ、平地との境界には鉄格子の堅い柵が延々と続くため、人間の入れるような隙間はないと、私を訝しんでいた。事実を照合させる為に君も現場へ来てくれるか、と頼まれたので、承諾した。明日の夕方までに再び来るようにと、付け足した。君たち、ゆつくり休むように、とも。

彼は、車の扉に背をもたれ掛けて待っていた。私を認めると、わかりづらく手を挙げて合図なんかして、珍しい。行きしなはつけなかったラジオを、帰り道はつけた。信号を待ちながらチャンネルをまわして、一通り聴いてみる。中南米の、軽快なりズムに、哀愁のある旋律の曲が流れると、彼は指をとめた。

櫛形へと消え始めた月。大型トラックの轟音がすれちがう道路。ことさらな感情のない男女。これらと、躍動するタンゴがちっとも結びつかないのが可笑しい。嘎れすぎていて、性別のわからない歌声には、愛する人を想うような、亡き人を愛し憂えるような力強さがある。



北谷ゆり
きたたに ゆり
1987年生まれ
大阪府西成区出身
大学在学中の2009年にグラビアタレントとしてデビュー
2017年退社

文芸思潮 新人賞 受賞の言葉 北谷ゆり

この度、賞を頂きましたこと、誠に、有り難うございます。

ご連絡を頂戴した折、先ず胸の内に湧き上がったのは喜びのそれ以上に、安堵に近い感情であり、長年と堆積していた自身の心の澱が、穏やかに拭われてゆくような思いでありました。この賞は、未熟な自身が第一歩を前に進むことへの希望であります。

終わりの見えない学びの只中に、気付かされることがあります。それは、日本語の計り知れない妙趣はどれほど素晴らしい恵みだろうということ、敢えて、混沌とした現代にそう感じています。自身も、人生を豊かにする様々な本に出会えた喜びを今、一層と深く感謝致しております。

知らぬ言語を聞き慣れぬうちに、心の中に、新鮮な旅情を寄せる。故郷を離れた身軽さか。異国で抱く不安の辛さか。恬として涼しげで、もの静かなまなざしに見惚れる。貴方の膝の上でまどろみたい。髪をそろりと撫でられたい。彼とは近いうちに別れるのだろうか。私の家に泊まってから明日の朝、一緒に行くこと決まっていた。彼がそう願った。気遣いなんてよしてくれよ、と薄笑いをした。

私たちには、壊れているものを共有する必要があった。修復したいのではない。傷と傷の摩擦で生じる、狂気じみた騒音が響く快楽を覚えてしまったから。

雲を多様な色で塗り潰した私を慰めた先生も、汚らわしいものを見限らずに、おしみなく私だけに、見せてくれた。だから私の心は豊かだ。

出かけたときのまま、片づいていない部屋に戻った。今夜は彼が先に寝付くまで、待つてみる。子供っぽい、かわいい顔をしているだろうとは、見なくともわかる。早起きになれている彼だが、陽の当たらない寝室でよかった。たとえ陽が昇っても彼が気付かないよう、祈ろう。



1000円(税込/送料共)
御注文はアジア文化社まで
DVD 1500円 本+ DVD 2000円(送料とも)



赤白休暇

石田夏穂

この上手く高まらない胸には、身に覚えがある。例えば、子供の頃、夢中になっていたテレビ番組が、つまらなくなつた時。没頭していた遊びに、白けた気分になつた時。同級生とのお喋りに、倦怠を覚えた時。しかし、そういう瞬間には、どうやら対処法がないらしい。昨日とは違う動きをする自身の胸に、戸惑うか、苛立つかしかないようだ。

そんなことを無意識に直感しながら、たつた今、羽田空港に到着した。

私は現地通貨を入手すべく長い列に並び、両替を済ませた。直近の出発時刻を示す黒い電光掲示板を見上げた。セキユリティを通過し、何機もの飛行機を眺めながら、大人しく熱いコーヒーを啜った。

私はコンセントを利用してできる座席を目敏く選び、スマホ

を充電させていた。それは、呼吸をするのと同程度に、身に染みついた行為だった。

搭乗時刻まで、あと一時間。

喫煙所で一服しながら、私は、おずおずとWA（ワッツアップ）を起動した。このLINE（ライン）の亜種であるところのWAをインストールしたのは、七ヶ月間のインドネシア出張を終え、帰国日を翌日に控えた夜だった。つい六日前のことである。その夜以来、私は愚かなほど頻繁にWAを確認せずにはおれなくなっていた。

努めて一切の期待を排除し、画面を覗く。果たして、画面の左下の「ステータス」には、未読の更新があることを知らせる、小さな青丸が表示されていた。

逸る指先を制し、私は、この何にも勝る感動を、しばし黙って受け止めた。

自らを焦らすように、私は吸いかけの煙草を捨てた。味わうつもりのない、ポーズだけの二本目に火をつけた。一刻も早く確認したい「ステータス」の前に、画面の中央下にある「チャット」を開き、Nのプロフィール画像に変更がないかを確認する。この丸くくり抜かれたプロフィール画像を、どういうわけか、Nは頻繁に変更するのである。しかし、今日のところは、プロフィール画像に変更はなかった。かれこれ、三日間は同じ画像を使っている。

私は、そのプロフィール画像をタップし、画面一杯に表示させた。それは、木の枝に並んで佇む、オウムっぽいカラフルな五羽の小鳥の画像だった。小鳥の背景は、果てしなく広がる緑の農地がある。農地の向こうには、鉛筆のような電柱が等間隔で立っている。さらに向こうには、緩やかな薄い稜線の山々がある。

絵画を鑑賞するように、その画像に見入った。半時間前にも同じことをしたが、自制心や罪悪感が入り込む余地はない。この名称不明の小鳥の鮮やかさ。一匹一匹の異なる表情。小鳥も目を閉じて眠るのだということ。そして、人間と同様に、一斉に眠るのではなく、めいめいの好きな時に眠るのだということ。私は、飽きもせず感じ入る。そして、この画像はネットから拾ってきたのだろうかと考え。それとも、N自身がスマホで撮影したのだろうか。というのは、この牧歌的な農地は、いつだったか「ステー

タス」で見たNの実家の様子と酷似しているからだ。私は心の準備ができた気になると、ようやく「ステータス」をタップした。「ステータス」を開くと、紙芝居のように、次々と撮影したばかりの画像が現れる。画像が切り替わるタイミングが読めないため、瞬きもせずに眺まなければならぬ。実際は、二十四時間以内であれば何度でも閲覧できるが、誰が何度見たという記録が残ってしまうため、体面上、私に閲覧できるのは一回限りである。

いざ開いてみると、そこには二枚の写真がアップされていた。最初の二十秒は、Nの親族と思しき三歳くらいの男の子が、サテを頬張っている写真。幼児らしく、その子の目は好奇心に溢れ、目一杯に開かれている。私は、後でNに知られずに振り返られるよう、十四秒あたりでスクリーンショットを撮った。

次の二十秒は、まさに休日の団欒というべき、賑やかな写真だった。一家ではなく一族であるところの、総勢十五名からなる老若男女が、こちらに笑顔を向けている。一族は、床の上に広げられた、幅五十センチ、長さ二メートルほどの、バナナの葉を取り囲んでいる。そのバナナの葉の中央には米の丘が築かれ、その麓にはサテとソースが用意されている。そうか、今日は日曜だった。それも、現在のジャカルタは午後十二時半。インドネシアの工事現場も日曜は定休だから、Nは一族の昼食会に参加しているところ

なのだろう。私は、Nが十人兄弟の七番目だと話していたことを思い出しながら、抜かりなくスクリーンショットを撮った。

興奮しながら喫煙所を出ると、先程とは別の売店で、二杯目のコーヒーを注文した。

子供の写真を振り返る。私は、その初々しい頬を眺め、そういういえばと、Nの浅黒い肌を思い出す。Nの親族の子供が白いということは、Nの浅黒さは生来のものではなく、年中の日焼けのためなのだろうかと考える。インドネシアの太陽を思う。肌が浅黒いことを必要以上に気にし、絶対に黒いTシャツしか着なかったNを思う。私自身、あの赤道直下の土地で、一生分の日焼けをしたばかりだった。スマホを操作する右手の甲は、思わず自分でも二度見してしまふほど、よく焼けている。

続いて、昼食会の画像にスワイプする。仲睦まじそうな一族を見やりながら、全く胸を突かれるとはこのことだと、私の胸は苦しくなる。画面の左下には、ちよつと意外なほど艶々とした、Nの横顔があった。私は、その場に突っ伏したい衝動を堪えた。

搭乗時刻の十分前になると、仁川行きの出発ゲートの周りには、俄かに人が集まり始めた。格安のエコノミーが呼ばれるのは、最後の最後と決まっている。その前にトイレに行つとくかと立ち上がるうとした時、私は突然の場違いな嬌声に

は思惑のうちであり、私の胸は、計画通りに事が運んだ策士のように、歓喜に満ちていた。

そう、これは、私の策である。この、強く望んでいることが実現した際に、一種のペナルティを自らに課するという行為。これは、いつのまにか私が身につけた、一種の生きるための知恵だった。例えば、第一志望の大学に合格したら卒業式をサボらずに出席するとか、体重を五キロ落とすことに成功したら辞めたくて仕方ないバイトをあと半年続けるとか、TOEICのスコアが七〇〇を超えたら新しいリュックを買うのを我慢するとか。

それらは全て、精神のバランスをとるためだった。

その策は、言うまでもなく、私の救いようのない弱さから発したものだ。希望が実現しなかった時の落胆を僅かにでも軽減しようとする、私の浅ましい保険だった。今回も私は、Nからのメッセージという私が欲してやまない代物の代償として、世にも恥ずかしい着信音を設定した。こうすることで、連絡が途絶えたとしても、私は「あの着信音が鳴らずに済む」という謎の安心感を得、落胆を誤魔化すことができる。

しばし、ぼんやりとエコノミー・クラスの長い列を見やり、精神統一が済んだ気になると、私は厳かにNからのメッセージを開いた。「ステータス」の足跡で、Nは私がNの投稿を早々に閲覧したのを知り、メッセージを寄越したのだろうか

飛び上がり、それが耳に入った周囲の十数名の搭乗客たちと一緒に、全ての運動と思考とを一時停止させた。

私は、中途半端に立ち上がった体勢のまま、何が起こったのかを理解すると、星の速さでスマホの設定をマナーモードに切り替えた。すると、嬌声は止まった。その間、三秒足らず。

この三秒間の異常事態は、ほとんどの搭乗客には速やかに忘れられたが、一部の搭乗客は、不審そうに観察する目、不愉快そうに非難する目、下品な粗相を面白がる目を、じっと私に向け続けた。しかし、あらゆるネガティブな視線の対象になりながら、私の頬は、別の理由で熱くなった。

Nからのメッセージだ。

不覚にも向かいの席にいた中東の敬虔そうな母親と目が合ってしまった。流石に決まりが悪かった。その母親の、意志の強そうな濃い眉毛には「恥を知れ」と書いてあった。足許には、ぼかんとした表情の子供がいた。私は迷ったが、ここでトレイに行ったら、さらに恥ずかしくなると判断した。そのまま腰を下ろし、残ったコーヒーを飲み干した。実際、尿意はどこかに吹っ飛んでいた。

この、誰もがぎよつとするR指定の着信音は、私の確信犯である。複数の男女が同時に達したらしい、匂い立つような嬌声。公共の場で鳴り渡るのは、これが初めてだった。自分で設定した時限爆弾に自分で怪我する格好になったが、それ

思われた。こんにちは。こんにちは。元気か？ 元気だ。仕事か？ 休みだ。いま何してる？ 飼猫と遊んでる（これは、真つ赤な嘘だった。これから二週間の休暇であり、モスクワとサンクト・ペテロブルクに行き、さらにイスタンブールで両親と合流するのだとは、Nには口が裂けても言えなかった）。そっちは？ 鳥に餌をやったところ。鳥は何を食べるの？ 蜂蜜と牛乳。

他愛のない遣り取り。私は、束の間の幸福感に浸った。

顔を上げると、搭乗客の列が、随分と短くなっていた。そろそろ並ぼうとリュックに手を掛けると、またもや、あの敬虔な母親と目が合ってしまった。一体いつまで、私を非難する気なのか。神聖な安息日の昼下がりを穢したことが、そんなに気に入らなかつたのか。ふん、上等である。私は、今からモスクワに高飛びだ。

ちよつと気が大きくなった私は、ほとんど衝動的に、その母親に不敵なウインクをしてみせた。

翌朝、私は白いズボンを身につけた。これは入社したばかりの頃「白いズボンに青いシャツ」という出勤スタイルに憧れ、いそいそと池袋のユニクロで買い求めたものである。五年前の話だ。しかし、代金の四八〇〇円也を差し出しなが

ら、薄々予感した通り、私とそのズボンと共に颯爽と出勤することはなかった。私は、私の太腿の直径に、それだけの自信を抱けなかったのである。

モスクワの朝だった。午前三時を、朝と呼んでもいいのなら。

五年振りの白いズボンは、やはり、馬鹿みたいに似合わなかった。

例により、私は三日ほど洗濯なしで着るだけ着、そのまま破棄するつもりで衣服だけを、リュックに詰め込んできた。その二軍の衣服たちは二度と本国に戻ることはない。これから私は十日間余り、やけにくたびれているか、もしくは似合わぬ衣服を纏い、異国の地をほつき回ることになる。格好つけたい誰かに会うわけではないから、私は好きなだけ、不恰好な装いに甘んじるつもりでいる。

シャワーを浴び終えると、私はWAを起動した。プロフィールの画像は、昨晚から白抜きの人間の頭部となつていゝ。つまり、何も設定していないのだ。Nには、時々あることだった。その他、WAに更新はなかった。

そのせいだろうか。

初日の市内観光は、私の胸を、些かも動かすことはなかった。

私は、何度も気を取り直そうとした。羽田空港での白けた気持ちは、気のせいだ。ほら、旅行ガイドで見たクレムリンがぶ。

それでもなお、私は、世界的な観光地にいた。どちらを向いても、周囲には満足気に土産を買ひ込む一家がいる。三脚の上に乗ったカメラを覗き込む、タンクトップのバックパッカーがいる。正しく行動している人達だ。私は、抱えきれぬほどの気後れを感じた。

Nのせいだ。

私は、特にやりたいこともなく、やるべきことも分からず、ただFree WiFiを求め、つらつらと歩いているだけだった。WA依存から少しでも距離を置くため、意図的にルーターを持ち合わせていなかったのだが、実に馬鹿みたいだ。

Nとは、WAで遣り取りする頻度が、途端に減った。今朝などは、ジャカルタとの時差を考慮しても、何かしらの連絡はあつても良かったが、何の音沙汰もなかった。

そもそもが、インドネシア語を満足に操れぬ私と、英語を満足に操れぬNという配役である。まともなコミュニケーションなど、端から期待するほうが間違いではあつた。以前は律義に英訳したメッセージを寄せたNだが、最近では面倒になったのか、インドネシア語のまま送信する。そういう未訳のメッセージを受信した私は、その文面をグーグル翻訳に入力し、意味を汲み取ろうとする。それで意味

リンがある。お洒落な喫茶店がある。赤の広場がある。マトリョーシカがある。知らない土地は、こんなに刺激的じゃないか。

半日ほど混乱した。

私の無感動は、変わらなかった。

惨めな気持ちで目抜き通りを移動しながら、私は巨岩のような無感動を持て余した。感動する器がなければ、旅行などをする資格はないのだと痛感する。そうだ、いつものように未知の土地に夢中になれないのなら、お前の目的は果たせない。お前には、忘れない記憶がある。逃げたい過去がある。それらを打ち消すために、お前は遙々ここに来たのではなかったか。こんなに無感動な心では、近所を散歩しているのと変わらない。

以前であれば、非日常を満喫できたはずだ。長く覚えられない名前のモスクを見上げ、逆光にならない角度から何枚も写真を撮り、歴史に畏怖を覚えた気になり、レーニンは何をした人物なのかと凡人らしい好奇心を発揮する。これでもかというほど街を練り歩き、小さな建物の造作とか、初めて目にする野花とか、頭上を漂う雲の高さとかを珍しがる。世界は広いと実感し、嬉しくなる。それらは、私の信じていた、旅行の醍醐味というやつだった。

以前は息をするようにできていたことが、できなくなつた。

今更だろうと、私は顎を上げる。予想していたことが、その通りになっただけだ。しかし、そういう予想をしたからこそ、お前はこの旅行を発起したのではなかったか。Nをなかつたことにするために、こんなところまで来たんじゃないか。

こんな無感動な心で、どうしてNを忘れられるというのか。

私は、ある種の旅行依存だったのかもしれない。

私の脳裏には、あの松尾芭蕉の有名な文句が、常に貼りついてた。とはいっても原文を諳んじているわけではなく、曰く「旅がしたくてしたくて落ち着かず、何も手につかない」という意味合いの、まるで思春期のような心境を綴った文章だ。その言葉を実践するかのように、私は学生の頃から、予算の許す範囲で食欲にどこへでも出掛けていた。三連休があれば、行けない土地などないという気分だったのだ。

確かに、徐々にではあるが、旅慣れしたのは事実だ。ま

ずは空港があり、市内に向かう地下鉄とかバスとかの交通手段があり、大きな駅に至る。きつとスターバックスがあり、マクドナルドがある。主要な観光スポットを巡る。スーパーに行き、格式張らない軽食を買って喜ぶ。ホテルにチェックインする。出店で何かを食べてみる。

そんなことを幾度となく繰り返していると、時には気が進まず、何かの任務のように、自分の身体を飛行機に押し込むような気分になることもあった。しかし、そういう場合でも、一旦現地に到着すれば、嘘のように気分が晴れたものである。

所謂バックパッカーではなかったし、実のところ異文化に興味があるわけでもなかったが、私は旅行を止めることができなかった。他にやりたいこともなかったし、没頭するほどの趣味もなかった。人付き合いも苦手だった。

旅行というやつは、私を空っぽにする。良い記憶も悪い記憶も、等しく私の身体から排出する。それ以外に、生きる上で、一体私が何を望んだらう。

そんな私が、この有様である。

もう旅行が人生の相棒でないと知ることは、それしか頼るものがなかった私にとり、想像した以上に、衝撃的な体験だった。いや、想像した以上に、というのは間違いだ。そんなことを、想像したことはなかったのだから。

先週、私は二十八歳になっていた。この無感動は、そのたらいいか分からない時も、人は泣く。

私は何かしらの逃避を求め、不自然に安かった地元ホワイトワインをラツパ飲みした後だった。まもなく割れるような頭痛が始まり、ベッドの上でのた打ち回った。

今朝は突然に一人旅という行為に悪寒のような嫌気がさし、何とか広場の噴水の横で、一歩も前に進めなくなっていた。二十八歳にもなる人間が、ぼやぼやと異国を歩き回っていることに、強烈な恥と怒りが込み上げたのだ。しばし、立ち竦むしかなかった。動けるようになると、内なる激情に任せて件のワインを買い、そのままタクシーを拾い（初めてのことだ）、不躰にも移動中にボトルを叩いた。タクシーの運転手には何か文句を言われたが、白々と「ロシア語わかんない」で開き直った。

これ以上、惨めになれるだろうか。

そのホテルの部屋は、十六階だった。しかし、どういわけか地上にいるバンドの生演奏が洩れ聞こえてくる。ドラムの強弱を大袈裟に押し出した一定の鼓動は、そっくりそのまま、私の頭痛を助長した。私は、このまま死んでしまおうと、本気で覚悟した。いや、このまま死んでしまえと。私は刻一刻と弱り、このまま息絶えればよい。

Nからの連絡は、羽田空港で受信した honey and milk を最後に途絶えたままだった。私からは、二日に一度は連絡していた。その都度簡単な遣り取りにはなるのだが、明

ことにも関係あるのではないかと考える。つまり、私は相應の経験を積んだということだ。積んだというより、積んでしまったということ。それは、何はともあれ、初心という貴重な生ものと引き換えであったのは、間違いない。

羽田空港を見た、あのNの親族の子供が脳裏に浮かんだ。Nが映っていなかったから、あのスターリンショットは早々に削除してしまったが、ここに来て、あの子の表情は象徴的である。あの目を見る。あれほど若いということ。何もかもが、珍しいということだ。あの子にとり、居間はモスクワであり、庭はシドニーであり、風呂場はニューヨークであり、寝室はマラケシュというわけだ。それは、誰もが記憶しない、人生のごく初期に訪れる、特別な感覚だ。

気づいたら、夕暮れになっていた。

私は、理由は何にせよ、失ったものを自覚した。ホテルに戻るために、立ち上がった。

憎たらしいほど、夕日が見事だ。

それでも私は、依然として、どこにも行きたくなかった。

五日目の午後三時、私はサンクト・ペテロブルクにいた。おいおいと、ホテルのベッドで泣いていた。今の自分を、一体どう扱ったものか、分からなくなったからだ。どうし

らかに、Nの意欲は減退していた。返答の文句も一変通りになり、絵文字一つで済ませることも多くなった。

あれほど好いたインドネシアの青年に、当然のように二週間足らずで忘れられたということ。Nを失ったことは、私を廃人にした。

私は、朝から何も食べていなかった。食欲はあるのだが、食べ物を調達してくるという行為が、億劫というか不可能に思われた。英語の通じぬ意地悪なロシア人を相手に、ルーム・サービスを依頼する気力もなかった。

Nに会いたい。

私は、もつと涙を出そうと、痛いくらいに顔を歪めた。

その七ヶ月間、私たちは馬のように働いた。

石油化学プラントを構成する機器全般のインスペクター（検査員）であるNは、日中は絶えず現場にいた。インドネシアの季節のない太陽は、人間たちに容赦ない。しかし、彼の地で生まれ育ったNにとり、そんなことは大した問題ではなかったのかもしれない。

現場は、石油化学プラントの増設工事だった。客先から作業許可証が下りると、小振りな頭に青いヘルメットを乗せ、Nは最も遠いエリアに徒歩で向かった。年若だったた

め、三台しかない自転車は使えなかった。Nは、大股で歩行する。その姿は、末端の兵隊そのものだった。

Nは現場に到着すると、機器ノズルのフランジ面に目を凝らし、傷があれば修繕の手配をし、なければ客先のサインを貰った。配管を接続する前に、全フランジの目視検査を実施することが、客先からの要求だったのだ。別の日には、蒸留塔の梯子をよじ登り、プラットフォームのボルトの締め方を、無理な体勢で確認することもあった。フラットシングの前夜には、貯蔵タンクの内部をモップで清掃した。そうして何ヵ月も、物言わぬ熱交換器とか反応器とかに、Nは真摯な眼差しを向けていたのである。

午後五時半を過ぎると、Nはいつのまにか現場事務所に戻っていた。その姿は、朝よりも幾分か痩せて見えた。時には昼過ぎに、脇の喫煙所にいることもあった。そういう時、私は現場事務所の窓から、やや寛いだ様子のNを見やった。その立ち姿は、横から見ると、ことさらに薄い。カマキリ、と私は呟いた。

翌朝は午前五時に目覚め、ぎよつとした。半日以上、私はベッドで死体になっていたのである。

あの殺人的な頭痛は、消え去っていた。私は起き上がるを切る。私が見つめていたのは、異国の地でも自国の習慣を押し通す、生来の凶太さともいべき精神だった。私は、この都市にチャイナ・タウンはあったかなと考える。八人にとり、異国は異国であって、異国ではないのかもしれない。旅行は旅行であって、旅行ではないのかもしれない。その板についた八人の動きは、私に、そんなことを考えさせた。

どれほど遠くに出掛けても、自分自身は置いていけないのだということ。陳腐な気づきだ。それでも、私は悪びれずにはつとした。

エントランスに戻ると、観葉植物の横で、夜勤のフロント・ボーイが、日勤のフロント・ボーイを相手に、引き継ぎらしき遣り取りをしていた。どちらも黒人であり、ロシア語と英語に通じていた。

エレベーターに向かう私に、夜勤のフロント・ボーイが「お前は、あのエクササイズをしないのか」と尋ねた。私は、半日前だったら答える余裕がなかったに違いないが、つと立ち止まると、ノーと答えた。ちよつと迷い、No, I am under training. と続けた。

そのフロント・ボーイは、私の回答に深く納得したのか、その文章のIをYouに変え、感心したように復唱した。Oh, you are under training. どういうわけか、私以上

と、ドラムのいない頭の快適さを嘯み締め、横になり過ぎたことによる背骨の違和感に「いたた」と健全に反応した。そろそろと背伸びをした。

依然として鬱っぽかったが、起床直後の鬱は、捉えどころのない乾いた砂地のようだった。

Nからの連絡は、なかった。プロフィール画像は、草藪の光景に変更されていた。拡大してみると、小さいワニとも大きなトカゲとも言い難い生き物が、その真ん中に映り込んでいる。

ちびちびと、室温の水を飲んだ。宙ぶらりんの心地だった。

顔を上げ、この部屋は禁煙だったことを思い出す。部屋を出ると、ホテルのエントランスから屋外に出た。フリースの隙間から入り込む早朝の冷気は、八月といえど、私を一気に覚醒させた。煙草の味も、妙に新鮮だった。

半分も吸い切ると、私は寒さに部屋に戻ろうかと首を回した。すると、折しもエントランスの回転ドアが軋む音がし、私の十メートルほど先に、ぞろぞろと八人の中国人が集まった。最も年配と見える一人が先頭に立ち、他の七人と向かい合うと、八人は、おもむろに太極拳を始めた。

私は凍えながら、八人の動作を見守った。八人の身体に染み込んだ全身の動きは、ゆっくりとした一定のスピードで、明るくなり始めた北緯六十度の白い空

に、私の状況を理解しているように見えた。

私は、Nに白いTシャツをあげた。Nが、歯で栓を開けたビンタン・ビールを、粗相したのである。出張用のスーツケースから、だぼだぼのTシャツを引っ張り出し、Nに着せてみた。そのTシャツには、潮を噴くクジラのコミカルな絵がプリントされていた。

翌々日に、Nはメッセージを寄せた。今日、作業着の下に、あの白いTシャツを着た。知ってた？

屋外の薄汚れたスピーカーからは、おもむろにコーランの朗読が鳴り響く。その日最後の祈りが、恭しく捧げられる。

私は、ふいに泣いてみたり、じつと鏡を見つめたりする。私は「知らなかった。また着てきて」と返信した。

生暖かい部屋に戻ると、WAを起動した。ここだと、ジャカルタとの時差が四時間であることを思い出す。引き潮の関係に縋りつくのは、無様なものである。しか

し、ごとごとと地上階からエレベーターで上昇する最中、私は、そこに回復の兆しを見たのだ。

回復とは、すなわちNの喪失を受け入れることだった。一方で、このたつた今湧き上がった兆しは、同時に「Nに連絡しろ」と私を焚きつける。一見ゴールとは真逆の方向に、私を向かわせようとする。あたかも、ゴールに至るために必要な助走距離を、確保させるかのよう。

私は「そのプロフィール画像は何？」なる短い質問を、Nに送った。

シャワーの合間に、久々の嬌声を聞いた。私は滑らないよう注意しながら、充電中のスマホへと急いだ。頭から滴り落ちる水滴の向こうに、Nの返信を見る。「材料倉庫の脇にワニがいた」とある。大きいのか？ 一・五メートルはあった。捕まえて、柵の外に放した。

それだけだった。Nは、私の疑問を解消した。もう答えるべきことはないとはかりに、メッセージの応酬は凍結する。

疲れた。果てしなく疲れた。

私は、記念すべき六日ぶりの応酬を、KWKWK（日本語のKWKWKに相当）で結んだ。決して投げやりだったわけではない。KWKWK以上に、この心境を的確に表現し得る文面は、なかったのである。もっと具体的な感想を伝えたり、質問を重ねたりすることはできた。しかし、それらが私を

私の帰国休暇の後半が益に当たったため、一緒に旅行しようという話になり、十四年ぶりの家族旅行に着地したのである。

私たち親子は、新市街地の路地を歩いた。ガラタ塔に向かう、上り坂だった。三人の額には汗が滲み、首許へと滴り落ちた。

「この坂ばっかりの感じ、サン・フランシスコみたいだねっ」

父は、ひいひいと満足気に言う。十歩歩けば出くわす野良猫に、いちいち一眼レフのレンズを向ける。そんな父の姿を、私と母は面白がる。

私は先程母がミネラルウォーターを買ったことを思い出し「お母さん、のど乾いた」と振り返った。母は、ミネラルウォーターを手渡した。それは、何でもな家族の遣り取りのほずだった。しかし、差し出されたミネラルウォーターが母の手の中で揺れた時、私は、初めて味わう絶望を知ったのである。私は二十八歳にもなり、母に五歳児と何ら変わらぬ要求をしていた。そのことに気づき、愕然としたのである。

その後、両親と行動を共にする最中、私は幾度も同じ崖から突き落とされた。年を取ることが、これほど不自由なことだとは知らなかった。私は独身であり、目下、無生産な感情の消耗に明け暮れているだけだった。今更ながら

さらに惨めにすることは知れていた。それだけ。

私は濡れ鼠のまま、窓際に向かった。薄汚れた窓の向こうに広がる、新しい夏の目を迎えた都市を眺めた。既に、太極拳の八人はいなかった。

イスタンブールは、観光客にとり、南の旧市街地と北の新市街地とに分かれる。観光スポットがひしめいているのは前者だが、特別に歴史や建築に熱心でないのなら、二日も練り歩けば十分である。そういう大半の観光客たちは、三日目あたりから新市街地を探索する。

「なんか、ニューヨークに似てるなっ」
路面電車
トラムでボスポラス海峡を横断する橋を渡る最中、父は言った。

「旧市街地がマンハッタンで、新市街地がクイーンズで」「アジア側がブルックリン、みたいな？」

母は、父の言わんとしていることを巧みに引き継いだ。父は「そうそう」と得意気になる。

両親は、手堅く生きていた。父は三年前に会社を興し、順調だった。母は母で働き者であり、地方銀行のパートを続けていた。来年は、勤続二十年になるといふ。今回は、

に、せっかくの異国で何をしているんだろうと呆れる。絶望とは、取り返しがつかないから、絶望なのだった。

「あの子も来れば良かったのにねえ」

私と母は、ガラタ塔を眩しく見上げた。母はサングラスを手にとった。私は反射的に「そうだね」と同意し「あの子」であるところの三つ違いの弟のことを考え、さらなる卑屈に陥った。二十五歳になる弟は「忙しいから」と、当然のように不参加を表明した。ここに来て、正しさというものを見せつけられた気分になる。

両親は、私の生き方を咎めなかった。それが二人で話し合った結果なのか、もともと子供の人生には干渉しない主



鳥影社刊

義なのか、それは知る由もない。国外の石油化学プラントの施工管理を生業とするタフな会社で働き、仲良く両親と旅行をし、婚約者を探す努力もせず、こそこそと喫煙し、気に入った野良猫がいれば「かわいーっ」などとはしゃぐ、随分昔に成人した子に対する葛藤はあるのだろうか。「のぼる?」

母は、私に顔を向けた。ガルト塔の周りには、ぐるりと長い列ができている。サングラスをつけた母は、ちよっとオノ・ヨーコのようだった。

私は「のぼらなくていいよ」という意味で「いいよ」と返した。

「いっか。すごい人だし」

それは、母の本心で間違いなかった。母は旅慣れた人だから、もはや観光に血道を上げる食欲さはないのである。一方で、私が「のぼろう」と言えば「じゃあ、並ぼうか」と母が賛同することも、私は知っている。優柔不断なのではない。母は、そういう態度の人なのだ。基本的に、私の主張を尊重する。とはいえ、そのことを知っている私は私で、母の懐につけ込むことはしない。私たちは、適切な車間距離で、成熟した親子という高速を走っていた。

しかし、母の真意はともかく、のぼらないという選択は、私の本心でもあった。例により、イスタンブールの眺望に、これっぽっちも興味を抱けなかったのだ。

母は生粋の猫好きであり、それは母の両親であるところの祖父母にも共通する。幼い頃から、母の身近には猫がいた。そのため、猫の生息に通じている母の言葉には、真実味があった。

猫は、あまり痛みを感じない。いちいち痛がっていたら、生きていけないから。

それは、本当だろうか。

その日、私は何回も、あの当然のように露出した白く細い骨を思い出した。

両親と共にいたとて、Nのことは、片時も頭から離れなかった。

私は、半ば鎌をかけるように、発信した。会いたいから、東京に来て。

歯磨きを終わると、返信が来た(両親の手前、常にマナーモードにしていたため、嬌声はなかった)。

しかし。

東京で働ける?!

私は、その返信に狼狽えた。一秒考え、それは知らない、と返した。本当に知らなかったのだ。

東京で働ける? だと?!

その返答は、予想外だった。私は、一週間とか二週間とか、休暇の時に遊びに来て欲しいと伝えたかったのだ。否

「じゃあ、こっちに行こう」

母は、賑やかな通りに向かい歩き始めた。母は街を練り歩くのが好きだ。父が追いつくと、私は「こっちに行くよ」と、下り路を指さした。

とある路地。サビ猫が、私たちの足許を通過した。その猫の尻尾の先が、どういうわけか、白く尖っている。よく見ると、それは飛び出た骨だった。

あの猫、尻尾から骨が出てるっ。私はたまげた。

当のサビ猫は、通りすがりの人間たちの心証などは気にも掛けず、路駐車の下に潜り込む。すぐに反対側から出てくると、歩道の隅の日陰になっている部分を選び、軽快に坂道を下って行く。

「あれ、痛くないのかな」

私は、ありもしない尻尾を、自らの尻の先に感じていた。その猫は、私にとり、なかなか衝撃的だったのだ。

「何ともなさそうだったけど。怪我をしたのは、ずっと前なのかな」

「さあね」

母の白いスニーカーは、凹凸の激しい石畳の歩道を、慎重に踏み締める。

「猫は、あまり痛みを感じないんだよ。いちいち痛がっていたら、生きていけないから」

応なく、コンビニでレジ打ちをするNを想像し、蟹工船のような遠洋漁業に従事するNを想像し、ぱちぱちと瞬きをする。それは、何か違った。たとえ、Nにとり、そのほうが今より何倍も稼げるとしても。そして、それがNの望むところだったとしても。何より、Nが私の近く、あるいは一緒に暮らすことになるのだとしても。

どうして? とNは問う。

私は返事に窮した。

Nの真意は不明である。何となく思いついただけかもしれないし、私を体よく追い払いたいただけかもしれない。しかし、ここは真剣に回答すべきと思われる。私は、グーグル翻訳の助けを得ながら、いつにない長文の本心を、インドネシア語で送信した。

あなたは、今の場所で働いたほうがいい。本業である、静機器のインスペクターを続ける。そういう専門職は、おそれと手放しちゃいけない。

送信後、私は放心した。あれほどNと一緒にいることを切望していたのに。そのためなら、死んでもいいとさえ思っていたのに。Nからの変化球的な問いという鏡に映してみた自らの本心は、もう一つの本心を、見事に裏切っていたのである。

景気よく「働けるよ」と答えることもできた。実際、何かしらの手段はあるのだろう。いっそのこと「仕事は東京

に一杯あるよ」などと、無責任に言い放ちたかった。いや、仕事などなくとも「あなたは働かなくていい。一緒に暮らそう」と答えてもよかった。しかも、それは非現実的な話でもなかった。大の大人二人だ。私が今の仕事を続ければ、どうにでもなる。

しかし、こと金や職に関する事で、私はNに適当な発言をすることはできなかった。私には、知っていることがあった。もう何回も、同じことを考えた。

Nは、一族の働き蟻だ。七男坊という立場上、一生そうなのだ。そのため、安易に収入の期待を抱かせることはできない。そして、私がNを奪うということは、Nの収入を頼りにしている、Nの一族を困窮させるということだ。

結婚という選択肢は、一度も考えたことがなかった。私はムスリムではないからだ。結婚のために改宗することはできるし、実際、そうする人は沢山いる。しかし、私はそうするつもりはなかった。手段として宗教を選択することに、抵抗があったのだ。真面目過ぎる？ そうだ、幸か不幸か、私は根が真面目な人間だ。笑ってくれてもいい。

もっと正直な本心も、明かそう。そう、目下、日本円はルビアの何倍も強い。私がNを奪ったとて、Nの一族に経済的な援助をすることは、できるのだ。しかし、私は、そんなことはしたくなかった。Nのためなら構わないが、Nの一族には、稼いだ金を渡したくなかった。

発言は、私の素通りを許さない、引つ掛かりとなっていた。外国に行ったことがない。

それは、一体どういうことだろう。想像できない。

私は、今更のように、Nの行動半径について考えた。その中心は、ジャワ島の西端に位置するS市だ。その一〇〇キロ東には、大都市ジャカルタがある。

そうだ、Nと同様に地元で雇われていた従業員の中には、ちらほらバリ島に行ったことのある者がいた。Nは行ったことがなかった。ジョグジャカルタになると、行ったことのある者はさらにいた。Nは、やはり行ったことがなかった。毎週末ジャカルタに出掛ける者がいる中で、Nは、ジャカルタさえも、一回しか行ったことがないと話していた。

確かに、Nは車を持っていなかった。持っているのは、親族と共用のヤマハとホンダのバイクのみ。しかし、バイクでジャカルタには行けないにしても、S市・ジャカルタ間のマイクロバスは、一日に何本も運航している。S市民にとり、ジャカルタは決して夢の大都会などではなく、行くことと思えばいつでも行ける場所だった。運賃も八万ルピア（六五〇円程度）だ。八万ルピアを娯楽費として捻出できないほど、NとNの一族は生活に困窮していない。

言うまでもなく、私は聖人君子ではない。決して、そうではない。

Nに腹の底から惚れていると同時に、私がNの信じる神を信じることはない。Nの一族に金を渡したくないと同時に、私はNが悲しんだり困ったりすることを何よりも恐れている。どちらも、偽らざる本心だ。大いなる矛盾。しかし、矛盾しているということは、その心が紛れもなく人間だということだ。

人は、言うだろう。お前には人を愛するに足る献身がない、我慢がない、覚悟がない、代償がない。つまり、一人の人間と共に生きる資格がない。

同意。

だから、私が求めたのは、期間限定の再会だったのだ。それ以上は、求めなかった。単純に、会いたかっただけなのだ。

N。今、お前は一体どういう表情をしているのか。

私は、再度促してみる。一週間くらい、遊びに来なよ。今の現場が終わった時にでも。

行きたい。でも。

俺、外国に行ったことない。

Nは、ふと送信した。

それは、何でもない発言かに思われた。ところが、私は再び返事に窮す。何と返そうかと頭を巡らせるうち、その

私は、ここに来て一つの発見に至る。インドネシア滞在中は、私もNも連日連勤の身であり、暇な週末などはなかった。だから、そんなことには気づかなかった。

そうだ、Nは、出掛けるということに全く関心がないのではないか。その口は、東京に行きたいと言う。しかし、本心は遠出を望まないのではないか。

ふと思えば立ち、私は地図のアプリを開いた。Nの住むS市と、Nの職場のあるC市間の距離は、十二キロだと知った。そのまま東京を目指し、人差し指で北上する。その距離を体感せんとする。東京駅と赤羽駅の間が、ちょうど十二キロだった。

この十二キロの中に、Nの人生の、ほとんど全てがあるということか。

その人生に、長距離は存在しないのだ。外国に行ったことがない。

私にとり、それは何だか、計り知れない人生のように思われた。

ようやく私は、パスポート持つてる？ と問拔けに尋ねた。

こんな質問をしたのは、初めてだった。というより、こういう質問があるということ、私はたった今知ったのだ。

私たちは、「セマー」なる旋回舞踊を鑑賞した後、ホテルのテラスで夕食をとった。母は、父が鑑賞時間の半分は寝ていたと笑い、そういう自分も四分の一は寝ていたと自白する。日本とは、六時間の時差があった。

私は、クラブ・サンドと赤ワインを交互に口に運びながら、両親がいればこそ、このイスタンブールの滞在を、一日もホテルに引き籠ることなく過ごせたと実感する。そして、この実感は、もう私に一人旅はできないだろうという、一つの寂しい確信となる。もう私には、感動する器がないのだから。

隣の父は、ここに来てカルボナーラを食べていた。目の前の母は、ケバブを食べている。

両親に「旅行が退屈になったことはある？」と聞いてみようとした。しかし、その質問をすると、今私がこの旅行に退屈しているような皮肉に聞こえてしまうため、私は口にしなかった。

代わりに「明日はどこに行く？」と、晴れ晴れしい前向きな声で、私は両親の顔を上げさせた。

「どうしようか」

母は、食べながら読んでいた「地球の歩き方」の頁をめくる。「あんた、どこか行きたいところある？」と尋ねる。私たちは、もう大半の観光スポットを制覇していたのである。

きや探索が何より好きな人間だと信じていた。そのため、旅行中に休憩などありえないと考えている娘に、自分たちの希望を発表できないのである。この点については、父の素直さも発揮されなかった。

無論、私から別行動を提案することはできた。しかし、それも気が進まず、私は硬いパンの耳と一緒に飲み込んだ。私たちは、まあ、明日の流れで決めようという雰囲気は落ち着いた。

異国の地にいるのは知っている。一生に一度しか来ないであろう土地だということも。金も払った、時間も捻出した、長いフライトにも耐えた。この、世界中の人間を呼び寄せる、またとない観光地のために。

「だけど、だからなに？」

八月のイスタンブールは、午後八時を過ぎ、ようやく帳が下り始めた。スマホの画面が自動的に明るくなり、私たちの顔を下から薄白く照らし出す。やがて目が疲れたのか、両親はスマホを伏せ、ぼうっとした。母は暮れなずむ街並みを眺め、父はおもむろにフォークを手にとると、皿に残ったオリーブにチャレンジした。オリーブの種に「なんだこりゃ」と目を丸くする。

そうだ、私たちは、旅行の醍醐味を知っていた。そして、旅行を堪能した分だけ、その退屈というやつも。私は、先程発しかけた質問を、野暮な愚問だったと恥じた。口にし

「黒海に行きたい」

父の思いつきのような発言に、母は「黒海？」と、付録の地図を展開した。折り目の部分が破れかけている、イスタンブール全域の地図である。

「遠いよ。また船に乗らなきゃ」

「陸路で行くのは？」

「駄目。丸一日かかるよ。黒海だったって、ただの海だよ」

「じゃあ、アジア側に行ってみる？」

「何があるの？」

「多分、モスクとか」

「えー、もうモスクはいいよ」

家族の前で、気取るような父ではなかった。職場ではストイックな人間にありがちな特徴なのかもしれない。父の子供のような反応に、私と母は笑った。その笑いには確かに、同意が含まれていた。

あえて言葉にはしないが、私には、両親の本音がありありと見えていた。明日はホテルでのんびりしたい。ドアノブにPlease do not disturbなる札を下げ、ベッドの上でだらだら過ごしたい。まだまだ元気とはいえ、両親は五十年代だった。セマーの最中のうたた寝にしろ、ちょっと疲れしているのは明らかだった。

両親だけだったら、そういう忌憚のない意見が共有されていたかもしれない。しかし両親は依然として、私が街歩

なくて正解だったと、母と同じ方向を見やる。旅行が退屈になったことはある？ だと？

「あの人、パスポートとか持つてるのかな？」

私は、唐突に両親に聞いてみた。両親は、私が顎で示した先にいる黒服のウェイターに目を向ける。あのウェイターは一昨日の朝来た時に、どういうわけか、あれこれと私たちの生い立ちを片言の英語で披露した。そのため、私たちの印象に残っていた。

「さあ、どうだろうね」

「トルコはいっぱい国境に接してるから、持つてんじゃないかね？」

勝手な推察が始まる。まもなく別のウェイターが、テーブルの真ん中に洒落たキャンドルを置きに来た。

「なんかさ、インドネシアにいた時、パスポートを持ってない人に会ったんだけど、すごい驚いちゃった」

その晩、私は最初から、このことを誰かに話したかったのかもしれない。共感して貰うためではなく、慰めて貰うためでもなく、教えて貰うためでもなく、偏に、私が語るために。長々と語る必要はなく、感情を込める必要もなかった。ただ、その個人的な馬鹿げた驚きを、言葉にして外気に晒してみたかった。

私が驚いたのは、言うまでもない。パスポートのない人生は、私には考えられなかったのだ。あの十年毎に更新す

る日本籍のパスポートは、まさに身体の一部であるかのよう、濁った血の色をしている。それは、私の長距離を約束する証だった。私が今日まで生き延びるために必要だった、逃避を許してくれたものだった。

父は「そりゃあ、持っていないやつは持っていないだろう」と、私の無知に憤慨した。私はちよつと気分を害し、無防備に過ぎたかなと、返事をしなかった。

「まあ、インドネシアだからな」

「でも、何だか不思議だね。あたしたちは、当然のように持つてるから」

母は、中立的な立場をとる。しかし、母にしても、パスポートを作ったのはOLの頃ではなかったか。

「そう、なんか、免許持っていない、って言われた時の感じだったの。いい大人がさ、免許持っていないと、え、つてなるじゃん。え、持っていないの？ なんで？ みたいな。そんな感じ」

運転免許に例えると、父ははっとした表情になり、次の更新はいつだったかなと、財布を取り出した。あれ、ないっ。お父さん、家に置いてきたじゃん、落とすと大変だからって。そうだったっけ？ そうだよ、忘れたの？

夜が深みを増していき、目の前のキャンドルが幻想的な明るさを帯びる。小さな火のダンスを今更のように観察しながら、私は、Nとパスポートが切り離されていることに

両親の寝息を耳にしながら、WAを薄暗く起動した。何も変化がないのを確認すると、私は九月の日本のカレンダーを起動し、今年の三連休の日付を確認した。そうして、犯人が現場に戻るように、WAに戻った。そうして、九月の十六日、ジャカルタに来れる？

返信は、すぐに来た。

ジャカルタに来るの？

九月の十五日から十七日まで、ジャカルタに出張する。来れたら教えてね。

Nは、OKと返した。

そうだ、私は、もう旅行に「びっくり」しないのだ。ならば、これからは、長距離を必要とせずとも、生きていけるようにならねば。

誰かのように、半径十二キロの範囲で、強かに生きていかなくは。

上唇に、ちりちりとした陰毛の感触があった。私は、鼻で息をした。最初は、土の匂いだと思った。この土地の人間の股間は、一様に、こういう匂いがするのかなと思っただ。しかし実際は、大量に汗をかいた後の人間の匂いなのだった。

驚いたのと同じ分だけ、そのことに驚く自分自身に驚いたのではないかと気がしていた。

パスポートというやつは、不要な人には、全く以て不要な代物だということ。

救いようもなく、私は視野が狭かったのだ。

狭い世界に、生きている。

それは、偶然に父がトイレに立った時だったのだが、私は母に、その感慨を短い言葉で話してみた。

「もうすぐ三〇になるのに、まだまだだなあ」

ことさら真剣に受け止めて貰っても困るので、茶化すように、私は言った。

「お母さんも、知らないことだらけだよ」

母は、ちよつと陽気になった声で答えた。さり気なく、私の辛口の赤ワインを飲んでた。昔は下戸の母だったが、どういふ変化か、四十を過ぎてから、身体がアルコールを受けつけるようになったのだという。

「知らないことにびっくりしたら、どうすればいい？」

「びっくりすればいいじゃない。そのうち、動じなくなる」

まあ、それも寂しいことだけだね。

それは、揺らめく炎に照らされた母の横顔を目にしたが、私が勝手に付け加えた台詞だ。

そのことに気づいたのは、随分と後のことである。人混みの中で、ふと同じ匂いがした時、私は落ち着かなくなつた。匂いの発信源は、果たして、滝の汗をかいたドラゴンズ・ファンかスワローズ・ファンの観戦帰りの頂だった。その時、私は得心したのである。そうか、あの匂いは、たくさん汗をかいた人間の匂いなのだと。国境も性別も年代も関係ない、よく働き、ちよつと疲れた人間の匂いなのだと。七月初旬の、酷く蒸し暑い水道橋のプラットフォームだった。

そうか、こいつは、今日もたくさん働いたんだなどと、私は気持ちよく目を閉じた。最も通気性の悪い部位である。シャワーを浴びても抜けぬ、独特の籠った匂いは、私に、生きていると思わせた。こいつと私は生きていて、そのことに良いも悪いもなく、今、間違ひなく生きているんだと思わせた。

昔から、私は欲しいものに全力投球する前に、失敗した時の自分を救済する策を練る人間だった。欲びにも悲しみにも、私は正面から向き合うことができない。どちらも刺激が強過ぎるため、中途半端に、ハイエナのように味わうのみだ。

ビジネス・トリップ。大嘘だ。私は、三連休にジャカルタへなど行かない。

Nは、私に会いに来ないだろう。それで、私は救われる。なぜなら、私はNを待ち惚けさせずに済むからだ。架空の逢瀬は、双方にとり、架空に終わるというわけだ。

万が一、Nの気まぐれが炸裂したら、Nは私に会いに来るだろう。あのマイクロバスに乗り、お前の国境を超えるだろう。しかし、それでも私は救われる。なぜなら——いや、説明は不要だろう。

そうなった暁には、私は感慨深げに、雲の向こうの見えない月でも見上げよう。どこか池袋あたりのコーヒー屋で、溶けた氷で透明になったアイスコーヒを「薄いなあ」などとストローで吸い上げながら。

私は卑しい。こんな欺瞞を演じ続けなければ、苦しくなくてしまふのだから。

それでも、私は乗り越えるのだ。

Nに会うと、どういうわけか、いつも「五月だなあ」という印象に包まれる。多分、私たちが互いを知ったのが、五月だったからだろう。

どうして鳥が好きなの と、Nに尋ねた。やや考えた

生き延びるために。ならば、私も同じように進化する。

今頃は私の尻尾の骨も、剥き出しになっているに違いない。私も人並みに、数多の怪我をしてきたのだから。

しかし、未だ完全でない尻尾は、ある痛みには涙を流すだろう。その都度、好むと好まざるとにかかわらず、私は痛みを乗り越え、強くなる。

あのサビ猫のような、へっちゃらの尻尾を手に入れるまで。

その頃には、尻尾自体が、根元からなくなっているのだろう。



石田夏穂 いしだ かほ

1991 埼玉県生まれ
東京工業大学工学部建築学科卒業
同大学院理工学研究科建築学専攻修了
2020 現在、会社員
第38回大阪女性文芸賞受賞

後、Nは「歌うから」と答えた。

Nの隣で吸う煙草は、格別に美味い。私たちは、明るい昼間の雨を眺めた。久々の乾期中の雨は、すぐに止むと知っていた。

ある晩、Nはヤマハのクリーム色のバイクで、宿舎の前に来て来た。

私たちの身体は、強い向かい風の中にいた。時速は、時々五十キロになった。

私は右手をNの腹に回し、左手を肩に添えた。右を向いたり左を向いたりした。紺のペラペラのパーカー越しに触れるNの腹は、素の肌に触れた時よりも、何だか実物に近い感じがした。減速と加速の際は、その腹に反動に耐える力が入り、ぐっと固くなった。あんなに痩せているのに、握ってみると、一握りの脂肪が掴めるのは不思議だった。

C市では、ヘルメットを着用せずとも、取り締まられることはなかった。走行中、Nはしょっちゅう話しかけてくる。その度にこちらを振り返るので、危なっかしいこと、この上ない。何を食べたいかと聞いてくる。サテと答えたものか、ドリアンと答えたものか、私は浮き浮きと悩む。

猫は、あまり痛みを感じないよう進化したという。偏に、

作者注※「猫はあまり痛みを感じない」と

いうのは、あくまで作品上の表現であり、
事実に基づいた記述ではありません。

文芸思潮 新人賞 受賞の言葉 石田夏穂

心の機微を、まずは認識し、ぼつぼつと文章にし、曲りなりにも一貫した何物かに仕立てるといふ作業には、いつも難儀します。難儀するのは、そこには正解がないからです。しかし、難儀しますが、わたしにとり、それは他にはない魅力を備えた作業です。

この魅力が、わたしを何時まで離さないのか、時々考えます。答えはありませんが、未だ生きるということは、わたしにとり、示唆に富んでいます。わたしの思いつくことは、既に語り尽くされたことだったり、もつと語られる必要のあることだったり、まだ誰も語ったことのないことだったりします。どんなに些細な心象も、大事に見つめながら、黙々と書き続ける時間を、今後とも持つつもりです。

この度は選出いただき、ありがとうございます。稚拙を読み、評価して下さった先生方には、感謝申し上げます。未だ、自分には一体何が書けるのか曖昧ではありますが、この度の受賞を励みに、さらに精進する所存です。

桃と煙草

深澤眞歩

桃味と煙草は口の中に貼り付く。
だから嫌いだ。

バナラの味だとか言われてもらったタバコを灰皿にぎゅーと擦り付ける。アコーディオンのように縮んでいく。どう見たって汚い灰が赤い光をまだ内側に宿したまま、ぼろ、と私のかける圧力から逃れてこぼれる。

「まさかった？」

バナラの味だと言った男が煙を吐き出すついでに聞いてくる。

「まずくはないけど嫌いなんだよね」

一回は本当のことを言ってみる。男は煙を吐いた口のまま、少し笑う。なので私は諦める。

「でも、これの、副流煙は好きだよ」

諦めたまま私は、風に乗った煙をアルプスの空気のように

に吸い込んでみせる。
すると男は、やべえ、と可笑しそうに笑ってタバコの火を消す。

グレーの空が、視界に下りてきて、(劇場の幕みたいに)憂鬱という色になっていく。(やっぱり幕というより膜。下り方は幕、その後は膜)

グレーという響きはもうすぐグレイプなのに、どうしてうきうきとした気分になれないのだろう。グレイプは好きなのに。グレイプも好きだし。

とりとめのなさの中で、私は桃味のカルピスソーダを飲む。

これは、私にとっては自傷。

今日は最大限に自暴自棄になりたかったから。煙草と、

桃味。私の口の中は、もう、カオスだ。

風が吹く。

髪の毛がばらばらと細い毛束になって乱れる。顔にかかって、いやだ。カルピスソーダで濡れた唇をしゅわしゅわと撫でていく。

うっとうしさが、自暴自棄に加速をかける。

バナラの味だと言った男とのキスを思い出す。うえ。全然バナラじゃなかったよ。煙草はゼーンぶウーロン茶の味になる。最終的に。そしてずっと残る。

ペットボトルの蓋をしめて、地面に置いて、私は前後に体重をかけてグラグラと揺れる。この公園にある唯一の遊具、水色のゾウさんの上でガンガン揺れる。

もしこのゾウさんがグレーだったら、私は揺れすぎて、ゾウさんと一緒に溶けて、曇り空のバターになれたかもしれないのにな。

ぎりぎりのところで、私は生き延びちゃってるなあ。

バターの寸前で、私は口の中を舐める。ウーロン茶味と桃味が、悪気もなさそうにそこに居る。

待ち合わせ場所にやって来たのは女だった。

私は目を点にして、それから少し後ずさった。

「え？ ユウキさんじゃないの？」

「そうだよ」

その女は、結構若そうで、黒髪ポブで、アディダスの紫色のジャージの中に変なキヤラクターがプリントされた白いTシャツ、その下に黒いミニスカートを履いていて、平然とのたまった。

「え？ プロフィール写真は男だったよね」

「あれは同じサークルのあんまり仲良くない男子」

私は、こんなことは初めてだったので、ハチ公前で狼狽^{うろた}えた。詐欺か？ レズか？ 普段使わない推理する脳の部分をフル回転させる。

「ユウキって本名なの？」

たしかに、女でもありえそうな名前だ。

「いや。本名はモモ」

「え？ 名乗るの？」

わざわざ偽名にしたのに。と思うと同時に、私は少し緊張が解けた。偽名に偽名を重ねるなんて面倒なことはないと思っただけ、それは本名だろうと合点したからだ。

「あなたの名前は」

モモが悪そうな笑顔で聞いてくる。どういう意味の笑顔なんだ、それ。私は本名を名乗りたくはなかった。そういえば桃って、私の嫌いな味じゃん。

「私は……タバ……タバコ」

「たば？」

「タバコ」

「え？ タバが名字でバタコが名前？」

「うーん、そう」

「うーんってなんだ」

モモが笑う。私もつられて笑いながら、江戸川コナンくんみたいな展開になってきてしまった、とほんやり考える。

「じゃああたしはジャムにすればよかったな。桃味のジャムってことにしてくれない？」

モモがまた悪そうな笑顔に戻って言った。

味になると、やだな。

私はそう思ったけど、モモのことを好きになる必要もないので曖昧に頷いた。

モモは欲求不満らしかった。

「でも男だと妊娠させられるかもしれないから」

苺のパフェに視線を釘付けにしながらモモは言う。

渋谷駅前のフルーツパーラーで私たちは向かい合って座っていた。

ハチ公前で、悪そうに笑った後、モモは、じゃあまあとりあえずホテルいこ、と私の手を引いた。私は慌てて、いや、待って待って、とその手を振りほどいた。

「私、女とやったことないしやりたくない」

ハチ公の後ろにバタバタと逃げ込んで、私はモモに言い

ほんとの人たち。その妙な言い回しをパフェの周りに浮かべて、私は、んん、と唸る。

「あたし分かんないんだよね。自分がどれなのかとか、カテゴリー分けする意味も。女の人とも別にできる気がするし。なんか、性に関しては広い野原で自由！ みたいな気持ちなの。野原に属してるの、あたし」

モモは話しながらも着々と苺パフェ解体仕事を続けている。

「野原のモモジャムなんだ」

私がマンゴーに集中しながら呟くと、ええへへ？ という変な笑い声が聞こえた。

「でも、しゃいかいかさういうものと思うと、狭まっちゃうんだよね。んー、野原が、トーストくらいになっちゃうの」

ジャム的には、適切な面積だけだ。

モモはアイスに頭がキーンとなったようで、ジャム的には、その後、適切な面積だけど、まで到達するのに三秒くらいかかった。

「だからね、そーいう中途半端な気持ちで、しっかり自覚のある人たちと会うのは、妊娠するより怖いし、すこぶる失礼かなって思ったんだよ」

性別偽って会ったり初対面の人間にえろそうとか言うのは失礼じゃないのか。

放つ。幸い渋谷駅前は平日の昼下がりでも人通りがあるので、無理やり連れて行かれるということもなさそうなので、ついでに睨んで威嚇する。

「あたしもないけど……。えーバタコはなんかえろそうだからいけると思ったのにな」

モモが残念そうに肩を落とす。って、え、ないの。なんなの、一体。

「せつかくホテル代下ろしてきたのに。んーじゃあ高いパフェ食べよ。それなら付き合ってくれる？ 奢るから」

私はどういう展開だよ！ どういう展開だよ！ と心の中で叫びながら、パフェなら……。と、なぜか承諾してしまったのだった。

「それなら、LGBTとかの出会い系で探せばよかったじゃん」

私はてらてらと輝くマンゴーパフェをどこから崩していかか吟味しながら指摘する。チラリと見ると、モモはついに苺を掬い上げて口に入れたところだ。

「いやっ、でも、考えてみてよ」

赤をちゃっつ、と飲み込んでからモモは長いスプーンを私に向ける。

「妊娠したくないから女としようと思ったとか言ったら、ほんとの人たちは怒るよ絶対」

私はそういう意味を込めて、口の中を三日月みたいなマンゴーでいっぱいにしてながらモモに非難の目を向けたが、伝わることはなく、ハムスターみたい！ とけらけら笑われただけだった。

結局私たちは閉店までその店に居座った。なんと、三回もパフェを注文した。(申し訳なくなったので私も少し払った)

そして渋谷駅前で、それぞれJRとメトロの改札へ別れた。じゃあねーとか言いながら。

私はなんとなくモモにはまた会えると思っていたのだけど、うちに帰って出会い系アプリを立ち上げると、ユウキのアカウントは消えていて、連絡先も交換していなかった。モモとコンタクトをとることは不可能になってしまっていた。私はそのことに少し狼狽えて、私からは無理でモモからはできるのは癪だと思って自分のアカウントも消してしまった。

白い物体が信じられない勢いで目の前を滑っていった。新橋駅の横須賀線のホームはJRのくせに地下にあって、何か恐ろしいことが起こりそうなくらい暗い雰囲気醸し出している。私はその洞穴のようなホームで、ゴオオオオ……という電車のやつてくる音が異様に長く反響してい

るのを聞くのが苦手で、あと、その音がしているのになかなか電車の姿が見えない線路の方を見るのも怖くて、ここで電車を待つ時は線路に背を向けてウォークマンの音量を二メモリ上げる。(背を向けても反対側も逆方面の電車がやってくるのであまり意味がない気もするが、そっち側とはだいぶ距離があるのでいくらか大丈夫だ)

今日も仕事帰りにそうして電車を待っていたのだが、その時に、白い物体が地面を滑っていくのを見た。電車による風で動いているのだろうか、ものすごく速かった。恐らくレジ袋とかそういうゴミの類だと思うが、それが何であるかは気にならないくらい速くて、私は爆音で聞いているのかっこよさも相まって吹き出してしまった。

「ゴミ、かっこいいー！」

映画のシーンでしか見たことはないが、カーレースを目前で見たらこんな気分になるのかもしれない。私は少し興奮してゴミの行方を目で追った。

「ゴミは、しゅー、と滑っていった、階段まで一瞬で辿り着き、降りてきた人にあっけなく踏まれた。」

「ゴミは、しょせん、ゴミか。」

「ん？ これって五七五？」

私は落ち込んでしまった。しかしそのまま観察を続けてみる。ゴミを踏んだ人は、少し考える素振りをしてから、ゴミを拾い上げた。

「アイスの均衡を崩しているからか？」と打ち込んで全世界に送信して携帯をベッドに放り投げる。

「ハーゲンダッツリッチミルク味としっかりと向き合う。」

私が携帯をいじっていたせいでさつきより柔らかくなっている。待たせてごめんね、といそいそとスプーンで掬い上げ、口の中で溶かす。味というよりこれはもうミルク。私はミルクのアイスクリームが好きなのだ。バナナより好きなのだ。

「あ。」

バナナと比較したことで、バナナの味だと言った男を思い出す。

そもそもバナナが私はそんなに好きではないからあの煙草の勧め方は最初からもう不正解だった。似合っていない髪の色も、セックス中に「ごちゃごちゃ」と喋るのも、なにかと目を覗き込んで質問するのも、私にとっては不正解だった。でもあの日私は不正解を求めていたから、実は全部正解だった。

バナナの味だと言った男とも、アカウントを消したせいで連絡を取れなくなってしまった。モモのせいだ。

あの日から一週間が経つが、私は時折モモのことを思い出してしまふ。色んなSNSで、ふと思いついて、モモ

「桃」も「もも」"momo"等のワードで、モモっぽいアカウントがないか検索していたりする。しかし、その名前の

あ、チョコモナカジャンボのゴミだ。

正体が分かって少し嬉しくなる。あの、茶色が見えないほどのスピードだったのかあ、と更に感動が増す。かっこいいゴミ。光より速いゴミ。ゴミ……。ゴミゴミ言っているがあのゴミだともとはゴミじゃなかったんだ。美味しいアイスクリームを包んでいた。それが、開封された途端にゴミ、と名称が変わる？ 失礼な話だ。なんの疑問も持たずゴミをゴミと呼ぶことを受け入れていた自分を恥じる。ゴミはてめえだあと稲葉さんが耳元で叫ぶ。いや、稲葉さんならゴミは俺たちだあって歌ってくれそう。

電車が来たので乗り込む。自分をゴミだと恥じた思考は座席に座れた喜びで吹っ飛ぶ。ただ、アイスクリームのイメージが後を引いて、ハーゲンダッツを買って帰ろうと心に決めた。

スプーンのみくらみで平らなアイスクリームの表面をぐっと押すと、カップの淵から白い液体がぷっくりと浮き上がってくる。私はこれがちよつと怖くて、不安な気持ち少しだけ心を掠める。でも、いつもアイスへの期待が上回り、その不安は溶けて液体になる。

「だけど、今日はこの独自の不安を誰かに知ってほしい気分になって、私はSNSを開く。」

写真を添えて、『これが少しこわい。なんか不安になる。』

アカウントは、死ぬまで見続けても見終わらないほど存在するので、結局途中で気持ちが悪くなってやめる。

二つ目に頼んだメロンパフェが運ばれてくると、モモは驚いて口をぽかんと開けて、よだれを垂らした。

「よだれ、よだれ」

「私が言うと、モモは慌てて口を拭って、」

「よだれ垂らしたの人生で初めて」

と言った。

「いや寝てる時とかに絶対垂らしてるよ。垂らしそうな顔をしてるし」

「それはカウントしない！ 意識のある時に垂らしたの初めて」

モモは反論を繰り返して、しゅんとした。

「えっごめん……全然垂らしそうな顔じゃないよ」「違うの」

モモはフォークでメロンを突き刺し、ゆらゆら上下に力なく揺らす。

「今あたしはメロンパフェの大きさに驚いて口を開けてたの。おいしそう、じゃなくて。多分、おっきーい！ の後に、おいしー！ がくるはずだったの、あたしの中では。そういう順序でリアクションをしようと思ってたんだけど、おっきーい！ のとこで人生初よだれを垂らして」

しまったことに落ち込んで」
少し分かるような気がした。

「でも、はたから見たら、おいしそー！ ってよだれを垂らしているようにも見えたよ。そういうことにしてもいいよ。目撃者としては」

「表現者の意図と鑑賞者の受け取り方の食い違いだね」

私は、よだれを垂らしただけで表現者になった人物をメロンパフェ越しにまじまじと鑑賞する。

「でも、どちらが正しいかは分かんないね。あたしの頭の中なんて、口に出さなきゃないこととおんなじようなものだしね、よのなか」

首を傾けてメロンの皮を避けて実だけを器用に齧る。

「伝わったものがすべてって、それもたしかにって気もするし」

右手で皮をつまんで実を食べる。ということはフォークは左。あれ、左利きなんだ。

「でもお言葉に甘えて、おいしそー！ でよだれを垂らしたことにしておおうかな。はじめてはシチュエーションが大切だしね」

突然、いたずらっぽい瞳と視線が合って、じっくり観察していた私はドキッとすする。

「よだれ垂らすことを初体験みたいに言わないでくれる？」

夜はバーになり、毎晩演奏家の人たちを呼んで生演奏をしてみらっている。

今日は遅番だったので、今私はグラスを洗いながらアコーディオンの音色を聞いている。ここで働くまでアコーディオンの音なんて聞いたことがなかった。昔ビデオで観た『ピーターパン』の中で海賊が奏でていた気もするが、そのくらいでしか聞いたことのない音だった。(しかもその海賊はその後フック船長に撃ち落とされていた気がする。なのでアコーディオンの音には少し不穏さを感じてしまう)

「すみません」

一人で店内のテーブル席に座ってメニューを見ていた男の人が、控えめに手を挙げて店員を呼んだ。まあ、店員は私なのだが。はーいと返事をして手をタオルで拭く。

「ズブロッカのおレンジジュース割りをひとつお願いします」

「はい」

注文を伝票にメモしながら、ほう、なかなか珍しいものを頼むな、と思いをチラ見する。珍しい注文をする人は、少し照れた顔だとかどや顔だとか、何かしらの表情が顔に表れる人も多い。その表情からその人の性格を想像してみたりするのも仕事中の些細な楽しみなのだ。

その人の顔を盗み見た時、表情に注目するより前に、お

はつたいけんどもーんとモモがメロンの皮の内側をべろべろなめながら笑った。

ハーゲンダッツを食べ終えて携帯を開くと、さっきの投稿にコメントが付いていた。

『おいしそう！（よだれ）』

私はまた、何かを諦めてしまう。口の中にほのかに残るリッチミルクの息を、細く長く煙のように吐いて、ちよつと減る。

新橋と銀座の間くらいに位置している小さな喫茶店で私は働いている。いわゆる隠れ家カフェというやつだ。本当に、知っている人しか見つけられないんじゃないかというような雑居ビルの中にある。四階にあるのだが、吹き抜けになっていて、自然に囲まれたバルコニー席がある。もともとそこは屋上で、倉庫をリノベーションして作られたそうだ。結構長い歴史のある、落ち着いた老人のようなその店を私は気に入っている。

テレビ局も近いからか、たまにお忍び感のあふれる人たちも訪れる。あまりテレビを観ないので分からないが、見たことのある気がする白髪交じりの男の人の掌を、占い師のような髪の長い女の人がマッサージしていた時は、思わずガン見してしまつて店長に怒られた。

や？ という引つ掛かりが脳にぶらさがった。ちよつどハングーみたいに。
見たことある。

芸能人かな。店長に聞いてみよう。考えながら、ご注文は以上ですか？ と聞いた。

はい、と頷いたその人の表情をちゃんと観察してみると、ほんやりとした無表情で、強いて言えば、今日のように少し肌寒い春の夜に不穏なアコーディオンが響いているような色をしていた。

「店長、あの人芸能人ですか？」

カウンターに戻つてすぐひそひそと店長に尋ねると、店長はちよつとだけ、こら！ という顔をしたが、こつそりとその人を見て、

「違うんじゃない？ 僕が知らないだけかもしれないけど」

と所見を述べてくれた。

「店長が知らないのに私知ってることあるかな……」

あ、常連さんですか？ 私が忘れてるだけかも」

「常連さんではないね。初めての人だよ。それより、注文は？」

店長は左手を出して親指以外の指先をくいくい、とさせた。急かす時の店長の癖だ。

私は注文を店長に告げた後も、この既視感について考え

ていた。出会い系のアプリで見かけたのかな。近頃は人生で見かけた顔の数がキヤパオーバーしてしまっている気がする。顔だけじゃない。名前も、知識も、出来事も。自分の耳で聞いたのかSNSで見かけたのか本で読んだのか、それさえも不確かになっていって、カテゴリー分けが曖昧なまま脳に保存される。大切なものを選ぶ作業を怠っていたら全部消去されてしまいそうで怖い。でも自分の大切を決めるのも今まで積み重ねた全てだから、総数が増えるたびに変わりがねない。そういう軽さに、どんどん重くなるからこそその軽さに、飛ばされるのか沈むのか分からずに、分らないのに進んでいってしまう日々を呆然と不安に思いつながら、今まで出会った全ての顔を名前を知識を思い出を、クリームソーダのアイスとソーダみたいにかきませる柔らかい緑にして可愛いと思つて生きるしかなさそうなんだ。

その日の帰り道、アスファルトの道端でべちゃんこになったポピーを見た。街灯のふもとで見つけたが、光から外れた闇の部分にあった。ポピーの色って、何色というんだろうか、オレンジ、朱色？ ただでさえぼやけた不思議な色が、引き伸ばされて暗さと混ざってさらに名前の分からない色味になって落っこちていた。その時、スピーディーなゴミの記憶が紐で結びついて、ぐんっ、と今の脳みその

は明確な一線があった。私にとって、大人は完璧で、しかし皆分からず屋だった。火曜日さんは、弱音もこぼすし、子供の私の言葉を真剣に吟味してくれた。

火曜日さんが、今何をしているか分からない。メッセージで、時々自分の病気の話をしていた。だから、私は勝手に、死んでしまったと思つている。しかし、確かめる術はない。だから、私は、悲しんでいいのかもわからずに、ウンともスンとも言わなくなつてしまった火曜日さんのブログのページを眺めては、何年も途方に暮れている。

モモは言った。

「あたし彼氏と別れたばかりでね、あたしから言つたんだけど未練たらたらでね、でもだんだん未練なのか性欲なのか分かんなくなつちやっただよね。未練って何？ 執着のことなのか。でも悲しいじゃん、何年も体重をかけて寄つてかかっていた人が、急に消えたら、ボタン、つて倒れるじゃん。痛いじゃん。痛いつて悲しいじゃん。でもちよつとカサブタができてきたらさ、痒くなるじゃん。その痒さがさ、性欲なのかもしれないって気付いちやっさ。でもその気付きは、悲しいの、だから痛くて。でもそれもまたカサブタになって、どんどん痒くなつて、あたし、気が狂いそうになつちやっただよ」

それで、とりあえずエッチしちゃえとおもつたの。

中に勢いつけて飛んできて、ぱーんと広がりを見せて、引っ掛かっていたハンガーを振り落としたり。

あの人、あの時チョコモナカジャンボのゴミ拾つた人だ。私はすつきりして、笑つてしまう。

めっちゃめちゃ知らない人だ。

でも、なんだか嬉しくて、生身の記憶と記憶が繋がった手触りが珍しくて、私は記念に、べちゃんこポピーを葉にして今日に挟んでみた。

火曜日さんという人がいた。

インターネットの街角で出会つた人だ。

その人のことは、誰にも話したことがない。顔も本名も年齢も分からない。ただ、ことばの並べ具合とか、テンポとか、何を可笑しく思うのか、何に怒るのか、そういつたことしか分からない。でも、私の言葉を気にかけてくれて、娘のように接してくれた。私はお父さんがいなかったの、火曜日さんのことをme.おとうさんと呼んでいた。

火曜日の「uesday」からとつたのだ。火曜日さんは、女の人なのだけれど、自分のことを俺と言つていた。me.おとうさんと呼ぶと、優しく返事をしてくれた。優しさは、言葉の羅列からしか伝わらないのだけれど、確かに優しかった。物識りで、時には感情も表に出す火曜日さんが、私は大好きだった。火曜日さんに会うまで、私と大人の間に

最後の桃パフェの前で渋い顔してモモは言った。大声でもなく、小声でもなく、普通のトーンで。

「とりあえず性欲を満たせば、純粹な気持ちだけ抽出できるかなつて。カサブタ剥がしちゃえば、ハッキリするかなつて。もう治つてるのか血が出るのか。意味ないんだけど。悲しいに戻つても、なんにも進むわけじゃないんだけどさあ」

恥ずかし気もなく、モモは涙を流して、その後で顔を歪めた。順番が、逆だ。私はまだふたつ目のチョコレートバナナパフェの底で、長いスプーンを泳がせながら、不覚にも、一緒に泣きそうになつていた。こんな、我慢せずに泣く人を、久しぶりに見た気分だった。

「えーん、悲しいよお。もはや、なにが悲しいのかも分からんよお。意味不明になつてきた人生が悲しいのかもしれないよお。みんなどこで区切りを付けてるんだあ。どこで章を付けてるんだよお」

「そうだよねそうだよね。人生混沌としすぎてるよ。こんとん……こんとんと、湧き続ける水みたいだ。脈々と、脈々と続きすぎ。水源が尽きなすぎ」

「バタコ何言つてるかよく分かんない」
モモが、涙をピタッと止めて私をじつと見る。私は、涙を拭きながら、心臓が早くなる。また、私は伝わらない言葉を紡いでしまったのか。私の中から溢れ出てくる言葉は、

あまり相手に伝わらないって、分かっているのに。モモだってちょっと変なこと言うから、伝わるかもなんて、期待してしまった。

「どういう意味？」

モモはクリームをたっぷり口に含めて、もももこと聞いた。泣いて赤くなった目を、私から逸らさずに。聞いてくれた。

「よく分かんないけど、詩みたいで興味深い。ふぎゅ〜あまい、うう〜悲しい」

色んな感情がごちゃ混ぜになって混沌としたモモの顔を、私は、舌の上で味にしようと試みていた。

次に遅番でシフトに入った夜も、ジャンボさんは飲みに来た。

ジャンボさんとは、チョコモナカジャンボのゴミを拾った人のことだ。

「シーバスリーガルミズナラのロックで」

ジャンボさんは今日もアコーデイオン無表情で注文を告げた。

きょうはズブロッカじゃないんですね

言おうか迷って、こくりと飲み込んだ。そういった店員とのコミュニケーションを、望んでいるタイプには思えなかったのだ。ジャンボさんは、一人で来ているのにカウン

い柔らかそうな黒髪、長い睫毛、グレーのスーツを着ていて、長い足を、組まずに机の下に控えめに伸ばして片足はリズムをとっている。

なんだ、私、ジャンボさんの特徴、長いところばかり注目してるな。ジャンボさんなのに。これじゃロングさんだな。

グラスの中の氷をステアしながら、カラカラという音がこつそりのつかる低い旋律を背景にして、ジャンボさんの横顔を見ていた。

暗い夜道で待ち合わせをした。

私がボシエットのチェーンをいじって待っていると電柱の陰からジャンボさんが現れた。

ポピーもちゃんどある。これ葉なんです。と言うと、いいね、と笑う。

翡翠色の夜だ。ジャンボさんのスーツも翡翠色に染まっている。

チェーンを触り続ける私の指ごと、手を自然に掴んで、ジャンボさんは言った。

「近道を知ってるんだ」

手を引かれて歩き出す。近道を知っているなんて心強い。早く着いたらすぐにできる。

早く着くってどこに。

ター席には座らず、テーブル席に座る。そういう人が、お喋りを求めて来店しているとは考えにくい。

「あと、さらさらお星さまのシフォンケーキ」

私がメニューを下げようとした時、ジャンボさんが付け足した。私はつい、ジャンボさんの顔を正視してしまった。さらさらお星さまのシフォンケーキは、メニューに載っている正式名称だ。でも、あまりに可愛いネーミングのため、男性は、このシフォンケーキ、などと略して頼む人が多い。ちゃんとと言っても、お星さまのシフォンケーキ止まりだ。さらさらから言う猛者がいるとは。しかも、一切表情を変えずに。

「ふたつ」

「ふたつ!」

思わずおうむ返しにしてしまう。ジャンボさんはチラと私の方をみただけで一瞥した。

「ないですか」

「いえ、あり……、あると思います」

「じゃあそれで」

切れ長の瞳を手元に戻して、ジャンボさんは、音楽に沈んだ。ように見えた。

今夜はチェロの音色が深く響いていた。

私はカウンターで店長に注文を告げてから、(店長も、二個!? と繰り返した) ジャンボさんを観察する。少し長

すぐにできるって何を。

ジャンボさんの冷たい掌を握りながら、私はドキドキと呼吸を乱す。

ジャンボさんは動物園の中へずんずん入って行く。

「近道って動物園?」

私は嬉しくなって聞く。ジャンボさんは答えず、夜に沈んだ。ように見えた。

動物たちは皆等しく眠っている。区切られた檻の中で、ライオンもゾウもウサギもキリンもヘビもワシもブタもカバもサルもヒヨウもペンギンもサイもバクもニワトリもトラもカメもハリネズミもクマもミーアキャットもモルモットもクジャクもパンダもカワウソもシカもリスもヒツジもフラミンゴもキツネもアザラシもアヒルもシマウマもワニも、みんな。交わることなく。寂しく寂しく眠っている。

「見て、さらさらお星さま」

ジャンボさんが空を指さす。

空には輝くものがあつた。でも、私はそれがお星さまではなく、クラッシュアイスだということが分かっていた。ここはクリームソーダの底だった。

目を覚まして、私は急いで煙草を吸った。

痒いような気がした。何かが。どこかが。

喉へ煙を流し込み、消えない味を作り出す。

火曜日さんのブログをたまに思い出す。火曜日さんの思想はロックで、無茶苦茶な部分もあって、でも、時々びっくりするほど繊細だったりした。

ある時火曜日さんが気泡について言及する記事を書いていた。私は、気泡に注目したことなんてなかったから、すごいなあと思ってその記事を読んだ。はちみつの中に沈む金色の気泡を、思い出のイメージに絡めて、少し切なく綴っていた。

火曜日さんがいなくなってしまったから、その記事を読み返したことがあった。火曜日さんの語る思い出と、私と火曜日さんの思い出が、気泡になって重なって、辛くなつた。私は、絶望的な気持ちで、なにかコメントを残してみようと思いついて、コメント欄を開いて、きぼう、と携帯に打ち込んだ。すると、予測変換から目が離せなかった。

私は、しばらく、その予測変換から目が離せなかった。はちみつの中で固まってしまった。

その時私は初めて火曜日さんがいなくなってしまったことに泣いた。

この希望の文字は、火曜日さんの言葉ではない。火曜日さんは関係ないかもしれない。でも、私はこの予測変換も、火曜日さんがくれた言葉と一緒に思い出している。今も。今も。

私はもうお腹いっぱい、パフェを丸々もう一つ食べるのは無理そうだったので、モモの桃パフェを半分もらうことにした。

「あーん」

モモがにやにやしながら桃とクリームを掬って私の口元へ差し出す。

「私桃味が苦手なんだけど、桃は平気なんだよね」

私はそのスプーンに食いつきながらモモに言ってみる。

「桃味の甘味がだめってこと？」

あ、そうかも。理由については考えたことなかったけど、桃味の甘味料の中に私の口に貼り付く成分が入っているのかもしれない。

「ずっと口の中に残っちゃうの。鬱陶しいくらい。煙草もだめなんだ」

「ふーん」

モモはあんまり興味がなさそうにパフェをほじくってから、身を乗り出して、内緒話をするから耳を貸せというような目配せをした。私が高んたろうと思いつながら顔を寄せると、モモは静かにキスをしてきた。そのキスは、真下のパフェのグラスにころんと落っこちて弾んだと思う。それくらい軽やかで、でも静かなキスだった。

「この味もずっと残してね」

「吸えるんだ？」

ベランダで一服している男の指の間にあったラークメンソールを奪って思いっきり吸い込むと、意外そうに言われた。髪がくるくるとして、髭を生やした三十代くらいのその男は、新しい煙草を一本箱から出して火を点けた。間接キスだ、とか、気持ちの悪いことを言う人じゃなくて良かった、と私は思う。シャリ、とカプセルを噛む音が聞こえる。

コンビニで沢山買ったスミノフとか缶チューハイを二人で流し込んで、お昼のワイドショーを無言で観ていたら抱き寄せられた。

白い今日に倒れ込む。

カサブタを剥がそう。

私はそのあいだ中、ずっと頭の中で唱えていた。

カサブタを剥がそう。カサブタを剥がそう。

少し痛い時、涙がこぼれてしまった。一度こぼれると、

止まらなくなってしまった。

でもこれは涙じゃなくて、きらきらお星さまでもなくて、気泡でもなくて、クラッシュエアイスなんだよね。

かき混ぜる。遠く、遠くの人たちをかき集めて、寂しいけど寂しくないように、寂しくて死んじゃわないように、氷と一緒に、ステアする。ステア、ステア、ステア、ステア。

モモがクリームにまみれた口元で、悪そうな笑顔を作った。

「ありがとう」

終わってから、くるくる髭はそう言った。

「何が？」

「いや、俺に会ってくれて」

ぐったりしながら、くるくる髭はそう言って、立ち上がって下着を身に着け、ベランダへ向かった。くるくる髭が窓を開けると、まだ明るい午後の光と風が、全部だるそうに部屋に流れてきた。

「いよいよ春だね」

私が声をかけてみると、

「あつ桜」

くるくる髭が言って、一瞬素早く右手を動かした。

「ほら」

振り向いて握っていた右手を広げると、小さな白い花びらが一枚、くしゃくしゃになってそこにあった。

「ほんとかだ」

「いる？」

「えっ」

「いや、いらねえか。もはやゴミかこんなん」

くるくる髭はなんだか照れて、ふっ、と窓の外へそれを

コラム 新文芸ドン・キホーテ

春樹くんさあ、昔からそのうしろのうしろ、あめめね??

村上春樹「一人称単数」(文藝春秋)を読む

村上春樹が七十一歳だと知り、驚かされる。

前作「騎士団長殺し」が世間的に不評だったそうで、ハルキスト達がノーベル賞の発表の度に飲み会をするサークルと化している昨今。六年振りの短編集として「一人称単数」が上梓された。長編は当たり外れあるも、短編は名手と呼んで良い腕前で、久々に自分より上手な純文学作家の本を読んだ気がした。

収録作に五段階評価で点数を点けるなら、初期恋愛小説を思わせる「石のまくらに」が5、ノーベル賞を意識しているか、妙に難解な短編「クリーム」は4、「チャーリー・パークー・プレイズ・ボサノヴァ」は3、「ウィズ・ザ・ピートルズ」が5、「ヤクルトスワローズ詩集」が3、「謝肉祭(Carnaval)」が2、「品川猿の告白」は4、「一人称単数」は1である。表題作の「一人称単数」は春樹自身も評論で取り上げたことのある丸谷才一の「樹影譚」をオマージュした作品とも考えられる。それゆえに「樹影譚」を読んだことのある読者には物足りないし、未読の読者には何のこっちゃわからない。春樹くんさあ、昔からそういうところ、あるよね?

自分のなかで村上春樹は「サリンジャーみたいな文体

飛ばした。
白いゴミが飛んでいく。ゆっくりと春に消えていく。くるくる髭が、ガム食べる? と銀色の包み紙をくれた。銀紙から取り出して口に入れて噛みしめると、ツンと刺激が鼻を通り抜けていって、思わず深呼吸をする。「このガム美味しいね。なんてやつ」
聞いてみると、くるくる髭は商品名と色を教えてください。た。
「俺はいつもこれ」
何故か少し誇らしげにくるくる髭は言った。

最寄り駅に着くと、空が夕陽に染められていた。私はずっと噛んでいたガムをレシートに包んでゴミ箱に捨てた。くるくる髭に会うことはもう二度とないだろうけど、この味のガムを買う度に思い出すだろう。そういうどうでもいような情報が私の成分になっていって、息を吐ききった跡になるんだろう。

桃味の煙みたいいな雲が、なにかの軌道のように、途切れることなく空に描かれていた。私はそれを口に含んで、今日も生き延びられたことを祝う。



深澤眞歩
ふかざわ まほ
1996 神奈川県生まれ
立教大学文学部(日本文学専修)卒
派遣社員

文芸思潮 新人賞 受賞の言葉 深澤眞歩

この度は嬉しいご連絡をありがとうございます。こんなにも嬉しいご連絡を私は一回やり過ぎしてしまいました。滞納している水道代の請求の電話だと思っただけです。息をひそめてiPhoneの震えのおさまりを待ち、電話番号を検索した時の驚きと言ったら筆舌に尽くし難いところです。私の夢はいつか誰かの水のようになることです。そうそ、水道代を払いそびれていなければ、蛇口をひねれば出てくるくらいの存在、そんなにも身近なのに、光が砕ければ人を救うくらいにも綺麗になるあの液体、もしくは日々通り抜ける車窓から折遠くに静止したように流れていく夕暮れの雲、そういう、人が自然と摂取していて、ちら、と気付いた時、小さくでも星風味にまたたくあれそれになりたいと、私と私のことばは夢見ながら、水道代を滞納しています。もう二度と滞納しないぞ。ここに誓います。へんなこと誓っちゃった。未熟な私の文章を飲んでもくださり、本当にありがとうございます。

で、初期のカポテーティーやその他のアメリカ文学みたいなプロットで小説を書く作家」と位置付けている。また、恋愛やファンタジーの中に死の影を漂わせるのが得意で、奥深さも醸すので海外でも評価されている。

だが、この感覚が問題だ。というのも、村上春樹の登場人物はたいいてい、思考力が暴走し、未来に絶望しきって死を選ぶ。ところが、現代人はうつ病やオーバークによる思考力の停止によって、死を選ぶ。村上春樹の描く高尚な死に、野蛮で幼稚な現代を生きる我々は昔以上にリアリティーを感じなくなつた。性についても同じで、村上春樹の主人公はよくセックスをするし、女性との関係を「寝る」というフィルターを通して考える。だが、今の若者、特に男性の大半がセックスをしなくなつてきている。日常で世間話をする異性すらいらない人も珍しくないと聞く。そんな人々がこういう文学に触れたら、何を感じるのだろうか?

村上春樹は七十一歳だ。現代人の感覚が失われているのは仕方がない。長寿社会になつたとはいえ、何があつてもおかしくない年齢でもある。筆力は衰えぬ作家なので、村上春樹が亡くなつたときは、ハルキストでなくとも、ハルキロスに苦しむのは必至だろう。作品は賛否両論なれど、読むに価する純文学作家がどんどん減つてきているのが、現代なのだから。